

1976年1月25日発行

主婦と共に
考える雑誌

わいふ

特集・天皇とわたしたち

138号



日本のおんなたち

暮しのなかに

閉じこもっているおんなたち

わたしたちは満ちたりて

心ゆたかに生きているのか

やさしい夫と

可愛い子どもが

わたしたちのすべてなのか？

青空はすでになく

海は濁っている

男たちは働きつかれ

老いた人は孤り死ぬ

閉ざされた家のなかで

手探りしているおんなたち

わたしたちの力を持ち寄ろう

探し出そう ほんとうの

やさしさと強さとは

どこにあるのか

心ゆたかなおんなの暮しは

どこにあるのか

男たちのかげにかくれ

もの云わぬおんなたち

わたしたちの言葉を持ち寄ろう

探し出そう ほんとうの

喜びと苦しみはどこにあるのか

心ゆたかなおんなの暮しは

どこにあるのか

I think *what are you thinking* 目次

内助の夫——日本にもいたすばらしい夫族——	2
その1……井出孫六さん	
座談会——夫と子どもは私たちのすべてなのか——	4
子ばなれの先をいかに生きるか	高山 みか 14
紹介したい本「大衆菜譜」——中国式おかず——	17
夫と子どもの使いかた	18

特集 天皇とわたしたち

☆天皇の後妃(わいふ)たち	和田 好子 20
☆投 稿	

あの日のお天皇	近藤 緑 26
箱入り天皇	三矢 久子 28
「天皇」の名において	中野 桂子 28
天皇のアメリカ訪問	樺 逸子 29

☆アマテラスのプレゼント	31
—— 祭祀者としての天皇 ——	亀山 利子 31
☆天皇の給料	林 慶子 31
	38

☆天皇の記者会見におもう	
—— 庶民のなまの声がここに ——	40

☆日本に女帝はなぜ出ない	43
--------------	----

◆随 想◆	44
-------	----

わいふにのぞむこと	山本 和子
商売繁盛	吉川 道子
年賀状は心で書くもの	三矢 久子
♣お便り♣	46

内助の夫

日本にもいたすばらしい夫族（その1）

井出孫六さん



井出さんは、奥さんの靴もみがくそうな、と信子夫人の友だちの間に令名をさせた孫六氏。手のかからない夫は世に多くとも、結婚にひとつの理念を持ち、それを実行している家庭は日本にはめずらしい。

結婚生活十八年。一人娘のあやさんは都立高校の一年生。

繊細さと利かん気の入れまじる笑顔が独得な、直木賞作家である。

——身のまわりのこと、ほとんどご自分でなさるとうかがいましたが、ご家庭での躾はどんなだったのでしょうか。

信州の旧家で大家族で、十人兄弟の末弟にうまれましたからね。いわゆる儒教的教育を受けています。要するに、長幼の序が貫徹していた。朝おきたら目上の人の前では手をついておはようございます、と挨拶するといったように。子どもにとって家庭がすてきに、ひとつの社会だったわけです。

おふくろは几帳面だったけど、ぼくには母親の手はほとんどかかっていない。小学校へ上がるころから、自分のことは自分でしていた。たとえば食事、めいめい箱膳をもってきて食べる。食べ終るとお茶で茶碗と箸を洗って自分の小さなふきんで拭いておく。

もうひとつ、父親を見ていて、ああはなりたくないと思っていた。反面教師ですね。風呂へ入るとなると、座敷から風呂場まで、着物と帯がつながって散らばってる。背中も母が拭く。何をするにも母が手とり足とりです。

まあ生まれつきマメなたちだったとは云えます。母に孫六が庭掃除すると草一本残ってない、と云われた。

父が隠居して、長兄が二十のとき、家長になった。責任感からか、この兄が実にきびしくてね。スバルタ教育です。こういう教育は体にしみついてしまつて、抜けない。二宮尊徳ですよ。

——ごきょうだいの多かつたことはどのように受けとめていられたか。

よかつたですな。もちろん何といつても庄迫感があった。けれど末っ子だったために、九人の兄弟の長所短所を観察することができたわけです。

——結婚についてとくに理想を持っていられただけでしょうか。

ものごころのつくころ敗戦を迎えたから、その影響は大きかつたですね。戦前長姉が当時の女性としては珍しい道を歩んだし、三番目の兄が赤化思想だと警察へひっぱられたりして、家族のなかで問題になっていた。それが敗戦とともに、一挙に正当化されたわけです。封建的家庭に育ちながら、その矛盾も感じていたほくにとって、新憲

法の理念は絶対のものだった。

男女平等の理念もそのひとつです。

観念的ではあつたけど、実に純粹に受けとめたな。男女の性とは何ぞや、平等とは何ぞやなどと、始終友人と議論してましたね。

中学三年のとき、野沢北校と南校が男女別学になつてのがけしからんと、友だちと三人で校長に申入れに行ったこともある。校長さん、困つてましたな。

妻とは学生時代から五年間もつきあつていて結婚したわけだけど、結婚してから家事をするのは臆却ではなかつた。結婚直後は二人ともつとめていて、ほくのほうがりりが早かつたから米をとぐのはほくのかかり。

このあいだ、柏原へ行って、鍛冶屋の仕事を見てきたけど、夫婦でいっしょに鉄を打っている。農家の主婦もそうですね。あれを見ると、ここに本当の労働、本当の夫婦の姿があるという気がするな。重労働には違いないけれど。今の体制の中では、そういうものが失われてしまふんだと思う。

妻のコメント——井出信子さん——

母が弱かつたので、父が家の中でもよく母を助けていました。そのせいか私には男が家事をすることへの抵抗感がまつたくないの。

結婚して子どもが生まれるまではずっとつとめていたし、子どもの小さいうちは家にいたけれど、どうしても働きたくて。家でできる仕事、というので校正の仕事をしています。

母親が働く、という事で子どもにも罪悪感を抱くひとが多いけれど、むしろ働く母親の姿が、子どもに何かしらプラスの影響を与えなくてはいいけないと思う。その点で、うちの娘は、自分も必ず仕事を持ってやっていく、と云っていますから、私が働いてきたことは、決してマイナスではなかつたのだな、と思つています。

彼が賞をとる前は、二人とも仕事と家事のバランスがとれていてほんとうによかつたのだけれど……目下彼が忙しすぎて私の仕事にしろよせがきて、これからどうやっていくか、いささか悩んでいるところです。



座
談
会

夫と子どもは私たちのすべてか

—— 三食ヒルネつき、永久就職と云われながら、主婦は、その生活のなかで、自分自身を生かす道を手探りにしている。 ——

出席者

小倉徳子

結婚八年

二児の母

倉橋澄子

結婚二十二年

二児の母

駒野陽子

中学教諭二十年

結婚十九年 三児の母

斎藤美佐緒

戦歴十一年（放送プロデューサー）

結婚二十年 一児の母

谷山道子

結婚八年

二児の母

田中喜美子

結婚十九年（仏語教師）

一児の母

林慶子

戦歴七年（テレビ・ディレクター）

結婚二十一年 二児の母

..... 主婦になったわけ
..... ならないわけ

田中 斎藤さん、十一年間のおつとめをおやめになったのは？

斎藤 入社した当時は仕事にかなり満足感があったんですけど、組織がだんだん大きくなってくると思うような仕事ができない。子どもも四才になって次々に色んな問題も出てくる。肩肘はって生きていると自分の人間らしさが失われてくるように思えて……。ある日地下鉄に乗っていて、「ああ私がやめれば全部片づくんだわ」と思ったとたん、なんか肩の荷が下りた気持ちになっちゃって、わりに未練なくやめちゃったんです。

その後、フリーで注文を取って仕事をしてました。新聞やラジオの生活記事書いたり、商品テストしたり。そのうちこの仕事も空しくなってきた。例えばトイレの水をブルーにして流す液なんていうものをテストする。そんなものが人間の生活を本当にゆたかにするとも幸せにするとおもうえないんですよね。逆に、そうやって女を暮しに縛りつけているんじゃないか

ないかって考えちゃって。

第一、自分は家事を大きらいなのに（笑）こんなテストをしていてちっとも心が満たされない。中途半端な仕事はすまいと思ってやめました。スバッとやめたのではなかったけど。

結果として専業主婦の生活に入ってしまったけれど、経済的自立がなくて本当に自由になれるのかっていうとその辺まだ割りきれません。

小倉 独身のときおつとめをしたことはあるけれど、結婚してから仕事をしたことと思ったことはないんです。自分が一番効率よく働けるのは主婦としてだ、と思ったから。

子ども育てることにはかなり意味を感じています。おやつを作ってやるとか、着るものを自分の思いどおりに作ってやるとか。外見整えてやるだけでもかなりの満足感がある。

主婦業ってのは楽といえば楽だし、難しいといえは難しい。主人の給料でも、うまく使えば使えるし、下手に使えば使えない。時間の使いかたも同じですよ。やりがいのある就職だと思ってます。

駒野 私はね、仕事をしない自分って

いうのはね、学校卒業したときから考えられなかった。人間として自分のパンをかせぐっていうのは男にも女にも最低の条件だと思っていたし、自分の仕事は好きだったし。夫にも仕事を続けることは念を押した形で結婚しましたから。

現実に行きづまったことは何度もあるけど、仕事をやめた別の生きかたは考えられなかった。自分でも説明できないんですよこれ。

斎藤 仕事について、不安を持たれたこととか、転職を考えられたことはないですか。

駒野 教えることが非常に好きでしたから……。しかし学校という社会にもやはりいろんな矛盾はある。現在も三年担任で進学指導の名の下に生徒をふるいわけする犯罪的仕事を行ってるわけね。

ただやはり、現代社会の中で仕事をしていくとなると、斎藤さんもさっき云われたように社会の矛盾を背負った形になる。その中で自分に何ができるか、その矛盾をなくしていく方向に何ができるかという事です。

私が教育運動とか婦人運動に手を出さざるを得なくなったのはそういうことなんです。学校でできないことをどこか他でやれないか、ということで……家庭、学校、運動と三種類のことを抱えこんでいて、すごく、きびしいことはきびしいんですけどね……。

田中 家事一切ご自分でなさるんですか？

駒野 いまは週三回、手伝いにきてくれる人がいます。子どもが小さいときは住みこみの人がいました。しかし安定的に、継続的にあるとは限らない。そのあいまいさが綱わたりのようになってしまってるね。でも二人の子どもが小さくて一番たいへんな時に、とてもよい娘さんが住みこんでいてくれました。運がよかった、と思います。

斎藤 私もお手伝いさんをたのんではいたけれど、息子がやはり不安定でした。それに私の仕事は不規則な仕事でしたし、そうかといって現場をやめて事務職にかわる決心もつかなかったし……。

駒野 教師でもやはり修学旅行で泊ったり、職員会議でおそくなったりもしま

すけれど、三、四ヶ月ごとに息をぬける休みがある。これは貴重なものですよ。続いた大きな原因ですね。だから女が仕事をしていくには勤務時間や勤務の状態などがね、大切だと思います。

………
母親の要るとき
………
要らないとき

斎藤 やはり自分が仕事をしていることで子どもにしわよせが来ていることに気がついたのが、やめた大きな原因の一つでしたね。

駒野 私も自分のしたいことをするっていうのはエゴイズムじゃないか、と悩んだことは始終でした。子どもは病氣もしますでしょう。病氣の子をおいて私が出ていかなければならないのか、ってね。ですから末の子の手が少し離れたときに女が働くということの意味をつきつめたくなったのね。

結果としてそれじゃ子どもにマイナスがなかったかどうかという点、そうはとも云えないと思いますね。ことに長男の場合は二十年近くも前でしたけど、子どものクラスでお母さんが働いているの

は私だけ。末っ子の頃はもう特別なことではなくなったけど。

上の二人は、あそこはお母さんが働いているんだという無言の圧力を社会から常に受けていたと思うんです。具体的な問題でも、母親がつねにそばについていないとしつけられない部分っていうのはかなりありますよね。子どもは目の前ですぐ云わなきゃ分らないんで、そういうった歪みはずいぶん受けていると思う。

斎藤 私もある一時期はどうしても母親がついていなきゃいけないかったんじゃないか、という実感が残っています。

駒野 うちなんか、世話する人が何人も代りますでしょ。子どもにとっちゃいい災難で、長男は、ぼくは保育モルモットだ、なんて。でも人間というものは、あるときプラスに見えたことがあとになってマイナスになることもある。長い目でみてみれば、失ったものと得たものの均衡がとれている、ということもあると思うんですね。

小倉 母親が家にべったりいますでしやう。すると子どもが母親をのりこえる時期が必ずくると思うんですよね。それ

までに外へ出たければ出る実力を貯えなければと思うんですけれど……。

駒野 子どもが親はなれる時期と、親が子ばなれる時期が一致していればいいんですけど、それがくい違うとお互いに不幸でしょう。私の場合、私は早く子ばなれたかったわけだけど子どもは違っていた。そのかわり子どもが親ばなれしたくなった時期に私は楽でした。

斎藤 ああ私はそれが逆になっちゃったわけ！ 子どもが朝目をさますと私の寢床に入ってきたがる。私は甘やかしちゃいけないと思って冷くつき放していたんですよね。今考えてみるとなんであの時で可憐がってやらなかったか……そのくせむこうが親離れたがっているいま、こっちはまだ子どもだ子どもだという意識がぬけない……。

林 お母さんが働いている場合、子どもにすまないっていう意識がつねにある、それが子どもを左右するんじゃないでしようか。

駒野 私もその意識がなかなかぬけなかった。長男が十才になったころ自分の生活を総括して本にしましたけどその中

で少しふっきれた気がしました。子どもにすまないすまないと思ってるのは結局よくないんだということ。ただね子どもには母親は必要なんですよ。たとえ三十才になっても必要だと思う。けれど小さいときは必要の度が違う。子どもに淋しい思いをさせたことは事実だとみとめなくちゃいけないと思います。

小さいときは帰ってきてから子どもと過ごす時間をすごく大切にしていって、いっしょにお風呂へ入るとか寝る前にお話するとか……。

林 その点働いてるお母さんの方が子どもに対する密度がずっと濃いんじゃないかしら。私も仕事か子どもかというとき、子どもを選んだわけ。しかし今考えしてみると子どもに対する密度はうすく育てたなと思う。中途半端なんですよ。

駒野 家事の部分は人に頼めたけれど、私は子どもに対する愛情なり責任感なりという部分は夫にかなり強く要求しましたね。夫も教職ですが、勉強なんか教えてくれなくてもいいから遊んでやってほしいというのはかなり強く要求しました。少し大きくなるとキャッチボー

ルするのなんかが子どもは嬉しくってね。父親と子どもとの関係は私には大きな救いになりました。

不安な母親たち

田中 しかしそういう風にはっきり夫に要求する妻は少ないですね。いったいこんなに母親が何でもしょいこむのは戦後のことではないのか。昔は沢山生んで放りっぱなし、それでも子どもはスクスク育ったでしょう。

斎藤 戦前の家族制度がこわれて核家族になり、今までの伝統が全部ご破算になってどうやったらいいか分らない暗中摸索の状態なんじゃないかしら。

駒野 たしかに現在の、夫が社会へでて働くから妻が全部家事を引きうけるという分業体制が非常にはつきりしてきたのはここ二十年ぐらいですよ。高度産業社会の成長とともにあったんじゃないですか、このあり方は。

林 戦後女が解放されたというけれど、育児と家事というものが全部女の肩にかかってきましたね。一方で能力ある女性

は社会に出て男なみにやっていくことに躍起になっていて、たがいに連帯意識もなかったし……。

小倉 それと個人主義が徹底して、隣近所とのつきあいがいい。私の子どもの時は、隣のおばさんが人形つくってくれたりしたけど、今じゃ自分がしてやらなくちゃ、絶対に与えられないんだもの。

駒野 若いお母さんたちすごく不安じゃないかと思うのね。自分一人で子どもを一日中見てなければならぬというのは息づまるような気持ちじゃないか。

谷山 結婚すると同時にね、一つの孤独だね、家庭の中はと閉じこめられてしまうのね。その中で子どもがぎざぎざと生まれてくる。子どもとだけつきあって暮らしている。これは異常な状態だと思えますね。仕事のあるなしでなく、社会がなくなってしまうということ。私一時教会に入りましたことがあったけど、今考えてみると宗教というよりそこに一つの集団があってそれが精神的な安定を与えてくれたんだと思う。子育ての上のいろんな不安を語りあえる相手がいるということ、それがいかに大事なも

のであるか。

林　そういう時の旦那さまとの会話は？

谷山　だからね、自分の不安の原因は主人がわるい、と非常に短絡的に考えていたわけ（爆笑）。今思うとそんな簡単な原因じゃなかった。（笑）

小倉　簡単にその人のせいにできる対象がいけないんです。主人のせいにね（笑）。私も、何でもわるいことは主人のせいのような気がしていた——も少しあなたがやさしかったら、とか、手伝ってくれたらとか。私も結婚してすぐ東京を離れてね。まわりに誰も知人がない。

言葉も違う。話相手がほしいんだけど近所の奥さんと話しても満たされなくて。

谷山　昔はね大家族の中でいやなこともあったかもしれないけど、孤独ということからは救われていたんじゃないかと思えますね。

小倉　だからといって大家族の生活には戻れない。我儘になってますからね。私はじめの子が生まれたばかりの時夫の両親と同居しました。姑は善意のかたまりだったけど、自分が本を読みたいとき、

疲れるだろうから早く寝なさいなどと云われるのがとつてもたまらなかった。

谷山　私はね、主婦に社会がないというのがね、問題だと思うの。

斎藤　全然ないわけじゃないでしょう。谷山　子どもを抱えていける場所がないんですよ。教会のいいのはね、バスが家のそばまで迎えにきてくれるの。

駒野　私の若い友人がね、そういう閉じこめられた若い主婦に出口をつくるために、子どもを預けっこして好きなことをしよう、などという運動体を作ってますよ。ずいぶん多勢の人が参加しているそうですよ。

……主婦業に能力は……
……いないのか……

倉橋　結婚して子どもが生まれる前しばらく女子高で教えていたんですけれどね、女の子っていうのはとてもいい加減なんですよね。この子たちがあと二、三年したら母親になるんだ、と思ったら愕然としちゃってね。子どもにとって最初の教育者は母親じゃないか——それがこんなことではと。もっとも自分だってその程

度でフラフラと結婚しちゃったんですけどね。今ぐらいい考えていたら今の夫と結婚しなかったと思うけど（爆笑）

今日この座談会に出るので家事専門の主婦たちに二三あたってみた。すると異口同音に、私は能力がなかったから外に出なかった、と云うんですよ。

私はね、育児っていうのは皆が考えている以上にずっと高度で大変な仕事だと思ってるんですよ。いや仕事とは思わなかったけど。つまり男たちの作ってる今の世界の価値観——生産イコール価値という価値観で子どもを育てるのは違ってるんじゃないかと思うの。

ある時期において子どもにとっては親はオールマイティだ、とるにたらない自分のようなものをこれほど絶対視してくれるというのはすばらしいことだ、と思っただけね。親がいなくても子はたしかに育つけれど、子どもは親が育てるのは自然なんじゃないか、という気がします。もし私が働きに出たら子どもを誰かに預けなくちゃならない。私以上に親身になって誰が育ててくれるだろう、と思っただけですね。

子どもの小さいときは自分のしたいことと子どもの存在がぶつかる。したいことをしていて子どもをうるさいと感じたとき、私は自分のしたいことの方をやめるようにしてきました。

今は子どもはほとんど家にいない。一日中自分の時間。主婦は孤独だとおっしゃったけど、私は外で働く方が楽だと思うの。全部自由だと云われて海の中に投げ出されたような、手がかりのない状態ね。相当な能力がないとそれを生かすことはできないんだと思う。だから能力がないから自分は仕事をしませんでしたとは考えたくないし、子どもを育てるということはそれだけの価値があるという気がする。原則としては子どもを育てるのは親だと今は思ってるわけ。

小倉 自分が誰よりも優秀にできる仕事っていったら子どもを育てることだと思う。けどあまり構えすぎてたら却ってボシヤってしまうし。

………
家事は女の天職か
………

小倉 女が仕事を持つことがただやた

らにいいとは思えない。能力のある人が出るのならいいと思うけど。男の人が足りないなら別だけど足りてるのに、女は子ども育てるのが上手なんだから家にいる方が、と思う。

倉橋 ただそれを利用されてる面もある。

斎藤 それを自分が選んだならいいと思うのね。私は家事がきらいだから外へ出たけどさ。女は家事が向いてるとか人が決めるんじゃない。よくよく問いつめてみるとそう思わされてるだけなんじゃないか。

小倉 それは感じることはありませんね。病氣したときなんか、食器なんか放っておいて寝るなんて云われても代りに洗ってはいけません。

斎藤 一人で暮らしてても家事はつきまとうものでしょ。男も女も家事はできなければと思いますね。一人で相談して、自分は家事を分担する、と決めたわけじゃない。

倉橋 それと経済力がないということ、ずいぶん感じますけどね、今と同じ生活程度を維持すること考えなければ自

分一人食べていくことはいくらでもできると思う。よく養われてるんだから仕方がないって言う人がいるけどそうは思わない。主人の月給が多かるうが少なかるうが、失業しようが病氣しようが、家庭は運命共同体なんで、月給が多いからえらいわけでもなし、少いからえらくないわけでもないと思うの。今の社会の仕組がそうになっているから男が外で働いているにすぎないんでね。

でも現実としてはそれは家庭がうまくいってるから云えるんで、そうでないとき女に経済力がないのはいかにみじめかということとは沢山見ているし、その矛盾は私もまだ解決できないんですけどね。

谷山 問題のないうちはそれでいいんだって私も思うの。

駒野 あのねさっき選べないのとは不当だっておっしゃったけど私もそう思う。人間って社会的なこともしたいし、家庭で子どもと遊んだりするのも楽しい。男にも女にもそれは同じことだと思ふのね。だから自由に選べたら女も被害者意識に押しこめられないですむ。いつかの私にくる人、深く食べる人で、サトウサンペ

イさんがね、ぼく払う人、っていったけど、男も今の社会の中で、女房子どもを首にしぱりつけて働かっていうすごい被害者意識持っているでしょう、生産性の原理だけで動いている社会の仕組みが男も女も不幸にしていると思いますね。

谷山 休日の過ごし方とかたというアンケートにも出ていたけど男と女とが極端にちがう。一緒に暮らしているながら全然別な生活をしている。やはり歪んだ社会だと思うわ。

駒野 男の人も家庭生活でもう少しのんびりできたらいいと思うんですけどね。

斎藤 というよりやっぱり仕事かね、モータリ社員っていうのがおかしい。

駒野 たしかにおかしい。

.....
何のために
.....
働くのか

田中 さっき倉橋さんが、今でも一人で食っていきこうとすればできるとおっしゃったけど、たしかに食うだけならできる。だけど自分の適性に合った仕事につけるかどうか。大体われわれぐらいの年

令になるともうそれだけで採用してくれない。行きどこがなければどうしても結婚は一種の職業だっていうことになる。その点はどうでしょうか。

谷山 だからそうならないように二人で長い年月をかけて意義のある家庭を作ればいいんじゃない？

田中 でも根本にある経済的条件っていうのは家の土台石みたいに厳然として存在している。そこに何とか意義を見出そうとして、みな一生懸命子育てをやっているけれど、倉橋さんみたいに子育ての才能がある人ばかりではない。密室的なところに押しこめられてやっていることがいい結果を生むかどうか。

斎藤 押しこめられた、というけど、それは自分の中のもう一人の自分がそっちの方が楽だから逃げたという面も実はあると思う。

田中 実際問題として、働いているお母さんのつらさと、家庭内で白紙の状態に投げ出されてる主婦のつらさというものは、次元の違いがあることはあるけれど、やはり本当の大変さは働いているお母さんじゃないかと思う。

小倉 でもね、私の友だちなんか、旦那の給料で暮らせないわけじゃないのに、洋服も靴も作れていいなんて外で働いている。自分ではとてもえらいつもりでいるけれど、子どもを保育園に入れて、外で働いてお金かせいで、どんなメリットがあるのかしらと思うの。

田中 それは男の人と同じように浅薄な、外で稼いでいるからエライんだ、の考えですよ。

小倉 ただもう少し贅沢がしたい、だけで働く人がふえるのはどうか……。

斎藤 男優先の社会で、同じ発想でやっていこうとしても絶対無理だし、無意味だと思う。女の論理、女の発想でいなくては。お金に換算して、それが価値あるもの、っていう考えはどうもね……。

小倉 経済力を持たなければ本質的に強くなれないというのはたしかだと思っけど……、しかし女はもっと無形の贅沢を身につけることも大事じゃないのか……。

林 とても大事なことよね。女だけにでなく男にとっても。

小倉 日本人はいつも精一杯で

の精一杯がお金を稼ぐことだけでなく、もっと他のものにつながれば……、たとえば昔、廊下をオカラで光らせましたね、そういう手づくりのよさに精一杯であればよいと……（笑）

林 その例はちょっと抵抗があるけど（笑） 要するに生活を大切に、内面を充実させることでしよう。でもそこを女だけがしゃいこんではダメなのよね。

田中 しかしね、子どもが手を離れた中年の主婦が、まず源氏物語の講義を聞きに行くというパターンがあるでしょう、内面を充実させるとか云って……、ああいう教養主義、自分の生活を変えていかない教養主義っていうのは意味のない気がしますね。何かにぶつかって必要に応じて読む本は、吸収の度が全然ちがう。

駒野 私も文学部出身だから社会科学の方は全く知らなかった。それが三十四、五のとき読み始めたら実に面白くてね。難しい本でも、一つ一つが思い当たって、ああそうだ、と思う面白さでしたね。

倉橋 それは人間が若いときより成長

しているからでしょうね。見る目が変わってきている。

田中 しかし主婦の生活の中だけで人間的に成長できる条件は日本ではことに限られているのではないか。生活に振がりがなければ……夫婦単位の交際はないし、市民のサークルも少ない。

……職業と能力の関係……

小倉 たとえば私がいま、事務員になろうとするでしょう。皆が事務員になってもどうしようもないから、やっぱり能力のある人だけが外で……。

田中 私はね、最近そこところが非常に疑問なんです。このところいわゆるエリート女性にインタビューする機会が多かったんですけどね、皆がそういうふうに考えている。能力のある人だけが働けばいいと。

林 要するに男の社会を肯定した上で立っている……。

田中 しかも女がその中でやっていくには能力、環境ともに男以上に恵まれないなければならない。

小倉 私はそれでいいと思うけど……。林 違います、違うと思う！（一座騒然。いけない、いいの声入りまじる）

小倉 私はそれでいいと思う、そういう努力をすべきなんだと思う。

倉橋 やっぱり能力があるから、という問題で考えてはいけないんだと思う。

田中 たとえば皆が能力をみがき、特技をみがくとしたらどうなるか。もう特技でも能力でもなく、ただの技能になっってしまう。そしたらまた、それは競争社会のくり返し。

特別な能力のある女性だけが外で働き、あとの女はすべて家庭に、というのは、エリート肯定思想なのではないか。働いて自立する、というのは人間の基本的なありかたなんだから、非人間的な労働に従事するというのではなく、皆が五時間程度はたらいて、家庭では夫婦で家事を分担したらどうか。

倉橋 五時間なんて理想論だと思ふ。実現できっこないでしょ。第一男だって自分の好きな仕事についてるわけではない。食うために働いているんだもの。

田中 食うために働くのをむしろ肯定

しているわけなんです。特殊な能力のある女性だけが働いてあとのひとは皆、家事育児というのはどんなものか。第一さっきの余暇の過ごし方でも分るように、四十、五十になると、分業でやってきた夫婦の間はまるっきり離れてくる。そうでない夫婦は非常に稀ですよ、駒野先生のところはいかがですか？

駒野 私のところは同業でしょ、だからある時は友だちであり、仲間であり、ある時はライバルであるという感じがすね。まあそういう意味では友だちと同じですよ。最近では子どもとの間もそうなってきました。

谷山 結局は働いたということが今ではすごくプラスになったわけですね。

駒野 今はそう思っていますけど……しかし過去の一番辛かった十年間というものは、一体これは何だろうか、この問題は何としても解明してやろうという怨念がたまっていましたね。

……… 人間的な労働 ………… 人間的な社会 …………

駒野 ともかく教職っていうのは日本

ではオーヴァーワーク、教職に限らず社会全体に人間らしい生活ができる労働条件がないんだと思う。日本だけがこんなすごい勢いで経済成長したっていうのは、みんなが生活を犠牲にして働いてきたからですよ、そのヒズミが今出てきている……。

斎藤 今までアメリカ式豊かさを手本にしていたのが、変ってきた。物質が溢れていても私たちの心は満たされない。何のためにこんなにアクセク働いてきたんだろう、生活を犠牲にして、資本を太らせるためだけだったと、わりに多くの人が気づくところへきていますね。

駒野 だからその延長線で、ただおつとめに出たがる女の人たちは、とっても浅はかな感じはしますね。

田中 しかしいろんなアンケートで見ると、専業主婦の場合でも、本当に家事が好きだという人は10%ぐらいしかいませんね。

小倉 たしかに少ないですね。私も家事は大きらいなんですけど、そうかと云って、しないでは気がすまないんです。自分のしたいことをしたいと思いだすと

家事はいやになる。

駒野 私は家事をやらねばならぬという脅迫観念がいやなんです。以前、手伝いがいて、土曜、日曜にだけ自分がお料理をしていたときは、お料理が楽しかった。しかし、毎日やらなければならなくなると、料理って、すごくいやなものになっちゃう。

倉橋 昔は伝統文化の担い手が家庭であり、主婦だった。それが今はないですよ。生産的なものが男の手に移って。

林 今の家庭はほとんどが消費の場ですね。生産と消費の分業化といっしょに、男と女の役割意識がすごく、固定化しちゃっている。

つい二三日前も、何日間か掃除機が、廊下に出っぱなしになっていたら、旦那が「掃除機どうしてここにおいてあるの」と云うの。私にすれば、気がついた人がどうして自分で片づけないのかと思う。彼にすれば自分は片づけないもんだと思いきこんでいる。

小倉 うちでは最近、主人がどんどん自分でやり出したの……うかうか出来ないんですよ（笑） 私だったら掃除機

何日出てるんだいと云われたら、ああゴメンナサイって片づける方がずーっと気が楽。

田中 やっぱり片づけるのは自分の役目だと思ってるわけでしょう。

林 最近の若い主婦って本当にそうね、どうしてなの？

斎藤 テレビドラマがわるいんじゃないかしらと思うくらい。共稼ぎ夫婦を描いていながら旦那が帰ってくると全部脱がせたり着せたりたんだしまったくするのよ。

林 旦那が身体障害者なら分るけど。

斎藤 ああいうテレビを小さいときから見せられてると無意識の中にそういうものが残っていく。

谷山 一人の人間が動かないで物を動かそうとすると大変な人手が要るのよね。お芝居で殿さまが歩いていくでしょ、襖がぱっと両側に開く、あれは二人の人間の人手がいるわけ(笑)

倉橋 この間私が入院したとき、家事は掃除、洗濯、炊事っていうふうに考えられているけれど、そんなことは案外家庭にとって附随的なことで、本当に大事

なのは一つの家族という集団を動かしていく力——それを自分がやっていったんだと思いましたがね。入院してて、皆の面倒がみられなくて悪いネって息子に云ったら、「ママっていうのはママだからママなんだよ」って云われた。別に何をしながらもママという存在が大事なんだと云われたことは実に私のはげみになりましたね。

谷山 私、逆にそれを子どもに云えたら幸せだと思えますね。「あなたは私の子どもだからそれでいいのヨ」って。出来、不出来じゃなくて。

田中 でも子どもっていうものは本来そういうものでしょ？

谷山 そうなんだけど……自分の思い通りにしようと思っちゃう。

倉橋 私はね長いこと、自分は家事が好きじゃないと思っていた。でも食べるのが無類に好きな亭主でおまけに客が多くて、否応なしにきたえられちゃったわけ。それならとそれを逆手に取ってむしろ積極的になっちゃった。そのうち人に教えるようになって、今はキーキの教室みたいなことをやっています。お

料理が好きというより、本当は教えることが好きなタイプで教師に向いてるんだと思うの。

子どもが小さいときは家にいなければと思ったけど、今は外に出ても何でもないと思う。ただお金になるだけのつまない仕事は、したくないという気持ち。
田中 お金が稼げる仕事もいいものですよ。

斎藤 お金を稼ぐことと自分の喜びが一致すればいいわけですよ。

最近友人が亡くなりましてね。それをつきかけにして、生きるということをつくづく考えさせられたのだけど、人間にとって一番大きい喜びは、自己表現、自己実現の喜びではないかと思うの。それがお金につながっても、つながらなくても、そういうものに向かって自分を鍛えていきたいと思う。だから、自分は無能力だから何もできないと考えるのは間違いで、自分に残された可能性というものを探し出して行かなければ。それが仕事に結びつき、収入に結びつけば最高の喜びになると思うんですけれどね。



子ばなれの先をいかに生きるか

高山みか



当年とって三六才。無職。結婚十年目。子供三人、上八才、下六才、中七才。私が今日を生きるは、まさにこのテーマを追うこと一つにあるような気さえする。『貴女が家庭におさまってしまったとはねえ』とか、『君が主婦専業とはねえ』などといわれたことがある。

思えば学生時代、職業婦人の方がモダンなような、ある程度教育を受けさせてもらったものの責任として、直接社会に還元出来る職業につくべきだと考えていたこともあったような気がする。しかし、この十年なんと私は必要とされてきたことか、ワァ、ゴメンナサイ、二度とこんな恥かしいこといいません。ハイ、アヤマリマス。

しかし、スツとするなあ。

家庭と職業、とくに家庭の外に出るの職業が両立できる、と私は考えない。だから、母であり妻である職業婦人の武勇伝にはすぐ感心して、根掘り葉掘り聞きだしてみると、たいていおばあちゃんが同居していたり、里が近かったり、御主人がとびきり理解のある人だったりして、がっかりしてしまう。それでは両立ではなく、分担ではないか。私は「両立できない」と考

えているから、「……させよう」としていいのではない。確かに条件は良くない。子供達のおばあちゃんは二人共仕事を持っており、三〇〇km以内に頼れる親類縁者はいない、主人は厳しい宮仕えの身である。しかし良き手本が両立を証明してくれるものなら、私も……という気持は、常に持ってきたのである。

思えば、ながいようでみじかく、みじかいようでながい十年でした。貧乏だった新婚時代、二万七千円の給料と九千円の家賃、そんな中でどうして土地など買ったものか。子供ができないのではないかとあせりはじめた途端、次々と二年半の間に三人の子の親となった。その間一年程、函館に転勤、十勝沖地震に追われるようにして仙台に帰ったりした。三番目が生れた春は、三人分のおむつを洗ったつけ。たゝむひまもなく、七十枚をフル回転したのです。

あの頃の、それこそ社会から隔絶された屋根の下の小さな世界から、私を引き出してくれたのは、夢にも期待しなかった一ヶ月のヨーロッパ旅行でした。飛行機代を借金し、子供達を置き去りに、一と月分の月給をドルに替えただけで、東ベルリンの夫を訪ねたのです。是非、ヨーロッパを君にみせたい」

と書いてきた主人が、「まさか、本当にくるとは思わなかった」というのをきいて、私も驚いたが、置いてきた子供達のことを想って、身を切られる思いを味わわれようとは思ってもしなかった。

私の両親は、仕事を持ち、五年に一度位、一年か、ながければ一年半も外国に滞在しており、そんな時の子供の淋しい気持ちを多少恨みに思ったりして育ったが、親の心子知らずとは、良く云ったものだと感じてしまった。帰国して、「一度もママを呼ばないでくれたのは助かった」とほめられた子供達も、私の顔をみた翌日から原因不明の微熱をだし、吐いてはトロトロと眠っている。「あゝ、こうして、お互に確認し合って、母子のきずなを一本一本でいねいに断ち切ってゆくんだなあ」と私は、教えられる思いであった。とても目を離せないのです。今日、またどの子が、私から一本の糸を、どうやって断ち切つてゆくのか、昨日までこの子の会話になかった単語が、どう云う風に入ってきているのか、良くみていると、はつきりみえるのです。

東ベルリンに滞在していた数日のある日のこと、天井裏でオペラを観ての帰り、ワインを飲みながら主人の仕事仲間のドイツ人とおしゃべりをした。洋の東西を問わず、嫁と姑の問題はやはり深刻だという。娯楽施設の少ない共産国では、結婚は比較的に早いという。その時、両親は息子の別居を快くみとめたが、それから十年、両親も年老いて息子との同居を希望し、仕事を待つ主婦の負担の問題から話がこじれて、ついに十二才になる

娘がありながら三十一才で離婚届にサインをしたという話であった。「貴方は実にうらやましい。なぜなら You have your own fate と彼がいった時、思いなしかうっすら涙が浮かんでいた。私はこの言葉を時々思いだす。「貴方専用の奥さん」。女性も社会にでて働かざるを得ない仕組みになっている国の、これもいつわらざる声なのだろうと思った。彼の涙ぐんだ目を出すたびに、私もまだ家庭の中に主婦としてやるべきことが沢山あって、とても外へ出て仕事と両立させるだけの力がないような気になって、日頃気にしながら放つてある戸棚の整理など、はじめてみたりするのである。

「貴女はそれでいい。御主人の収入でなんとか五人食べているのでしょ。年寄りはいないし、なにも無理して共働きする必要もないではありませんか」などといわれると黙ってしまふ人が多い。返事がないところへたゞみ込むように「でもね、収入があればあったで出る分も多くてね」などとなくさめてくれるつもりらしい人もいる。

私は家庭経済というものは、本当にむずかしいと考える。その家庭の生活設計や、思想、すべてを限られた予算の中にどのように反映させるか、社会経済の波に押されながら守り通すことは容易でなく、私など何度大蔵大臣返上を申し出たことか。一日たりとも気のゆるせないこの大臣の椅子にすわって、家計簿にむかい、これでもかこれでもかと、何か意地の張りあいのようなものさえ感じる。日常的にはやりくりの明け暮れであり、

それはどこの家庭も同じだろうと思う。共働きによって収入が多くとも、共働きによる支出も多かるうし、主人の給料で家族全員が食べられるとしても、言いかえれば、なにもかも主人の給料の中でやらなくてはならない。要は、自分達の理想に最も近いかたちで、この限られた収入が支出されていけばよいのである。

やりくりで頭が痛く、気がクサクサしてくると、私は十年単位で家庭経済を考えることにしている。訳も分らずに土地を買ったてはないか。預金もなしに家を建てたてではないか。子供達が元気に育っているではないか。両親はおかげ様で健在ではないか。これで充分。空は秋晴れ、頭はスッキリ、フアイト満々、私自身がここでデンと構えている意義を感じてくるのである。

と、まあここまでは大層調子が良いのです。問題はこの先なのです。まるで頭が空っぽなのではないかとうたがわれる程、そう単純に自分の存在意義を感じられれば、いうことはないのです。

全くのところ、朝、さわやかな笑顔で「いってらっしゃい」と家族を送り出し、夕刻、寛容なるやさしさで「おかえりなさい」ということは、それが毎日のこととなると、全く至難の業といいたいくらいだ。

「日常生活」という言葉のなんと雑多な、軽薄で、執拗で、無意味で、うっとりうしく、はてしのないものか。ええい、何

か事件でも起れ、

ああ、それが、当年とって三六才、無職、結婚十年目、子供……そうだ、自己紹介はすんでいたはずだっけ。

この頃、しみじみと生活という事を考える。事件？ 事件なんて、そんなものはやがては生活の流れのあなたにかすんでしまふものでしょ。それより、その流れをつないでいる日常生活、そのなつかしく、でんと構えて動じない、ひかえめで、安らかな……。

でもあるのです。よくみつければそこに自分を生かす小さな日向が。午前の読書。淋しい老人との挨拶、見返りを期待することのない奉仕、会ったこともない友との会話、自分をみつめる時間……そこに「子ばなれの先をいかに生きるか」の答の芽も、きつと。

「ママノ」 庭をかけぬけるチビ息子の声。

「……」 居間にて読書中の私の沈黙。

「ママノ」 庭を戻ってくるチビ息子の声。

「なあに」 初めて聞いた風な私の声。

「いたのか」 またかけ出してゆきそうな声。

「なに御用？」

「いるのかなあ？ と思っただけ!!」

「ムッフ。一時間も姿を見せず、どこかをすっとなで歩いていたくせに、通りがかりにちよいと声をかけるとはにくいねえ、しかし、子ばなれの時期も終盤に近づいたなあ」複雑なる胸の内の声。

つつく

紹介したい本

「大衆菜譜」より

中国式おかず



波多野須美編

主婦の友社 八八〇円

このごろの婦人雑誌には、いろいろうつくしい料理記事がいっぱいです。どれもおいしそうだけど、わたしたちの忙しい生活の中で、とり入れられるものは案外少ないとは思いませんか。

わたしたちは料理だけして暮しているわけではないから、あまり手のかかるもの、材料の高価なものは日常のたべものとして不向きですが、婦人雑誌では板前さんコックさん、料理研究家などという料理を職業としているひとたちに記事を書かせるから、どうしても高級品が幅を利かせがちです。それを作りはしないけど、きれいなグラビヤなどで見なれていて、アア、これが料理なんだ、こういうのを作れる人が料理上手なんだろう、とわたしたちは思い込んでいないでしょうか。この「中国式おかず」を見ますと、日常の料理とは、このように簡素で、手早くつくれて、おいしくて、伝統文化と

しても洗練されたものであるのが、本筋なんだなあ、ということを感じずにはいられません。

「中国式おかず」は、中国の料理書、

「大衆菜譜」をほん訳し、じっさいに作ってみて、書かれたものです。社会主義建設に努力しつつある中国では、なんでも大衆参加ということがさかんだそうです、地震予知も大衆が観測に参加して成功したとか。「大衆菜譜」もその式で、各地の大衆食堂や、家庭の料理を集めて、まとめられたということです。

私自身いくつか作ってみたので、それをご紹介して見ましょう。

▲にんじんのあえ物▼

にんじんをせん切りします。少し塩をまぜて、しんなりさせ、一回水洗いして皿に盛り、三つ葉のみじん切り少々とにらまたはねぎのみじん切り少々を混ぜます。調味料として、酢大さじ一、サラダオイル大さじ四、ごま油小さじ二、砂糖大さじ一、ばい半、塩小さじ一杯、辣油少々割合でまぜ合わせ、にんじんの量によって適宜にふりかけ、あえます。

なんてへんなものだろう、と思うけれ

ど、つくってみてびっくり、とても深味のある味で、にんじんをあまり好まない子どもも、喜んで食べました。

▲白菜の煮物▼

白菜を洗い、タテに三・四厘巾に切る。干しえび（中国のをよく売っている）を水少量につけてもどす。中華なべに油を熱し、ねぎのみじん切り少々をいため、よい香りが立ったところで白菜をいため、塩をちょっとふり入れ、干しえびをつけ汁ごと加えます。水を少し足し、白菜がやわらかくなるまでフタをして煮る。

あっさりして、とてもおいしいです。

▲とうふとみそ漬のいため物▼

もめんどうふ（二丁）をふきんに包み、水けをしぼるようにして、くずしてしまふ。中華なべに油を熱し、そのとうふをいため、さらに細かくくずします。水けがなくなりそうによく炒まったら、みそ漬のきうりとしょうが（市販のもの）のみじん切り各小さじ二、塩小さじ1/4、しょうゆ大さじ一杯半、砂糖も同量、ねぎのみじん切り小さじ二ほどを加え、ごま油をちょっとたらして炒め上げる。熱いご飯にのせて食べると天下一品。（Y）

夫と子どもの使いかた

「週休二日？ まっぴらよ。土曜まで

主人に家でゴロゴロされるんじゃあ」

亭主は丈夫で留守がよい。二十世紀の日本でも、そう思っている主婦は少なくありません。

「男の子は勉強第一。手がかかっても当り前」

というお母さんもずいぶんいます。

中学生のくせに、リンゴの皮が剥けない子。自分のふとんの上げおろしもしない子。母親が風邪で寝こんでいるとき、「早く起きてゴハンつくれよ」と枕を蹴とばしたという男の子は、家の中の王様のように育てられたのでしょう。

新婚当時はいざ知らず。四十の坂を越すころともなれば、夫の生活は仕事に追いまくられ、家の中では縦のものを横にもしない。

仕方ないわ、外で働いてくるんだもの。

あなたはそう思いはしなかったでしょうか。しかしちょっとした夫の手助けが、ほんの僅かな彼の心遣いがなくなったらと、そしてそれが当り前になってしまつたとき、家庭のイメージはみるみる色あ

せていきます。

家事は義務となり、夫は月給運搬人と化する。そしてあなたは子どものためだけに生きはじめる……。

いいえ、そんなことにならないために、忙しいうちの宿六にも、何をさせても失敗ばかりしている小さな息子にも、すこし、うちの中で働いてもらおうではありませんか。

（屋ごはんスト）

結婚当時は休日に彼が家にいるのが嬉しかったのに、だんだんうっとうしくなってきたね。ええ、結婚十七年。これはいかん、と思ったんです。何から何まで自分で抱えこんではダメだって。亭主孝行のようで、その実、自分で自分の家庭を楽しくないものにしている。いつも自分だけが損をしているみたいで、被害者意識が出てくるのね。

大体休日にみなが休んでるのに主婦だけが忙しい、ってのがおかしい。そこで始めたのが、休日の屋ごはんスト。

という大げさだけれど、要するに休

夫と子どもの使いかた

日だけは、屋ごはんを家族のめいめいが作るということ。もちろんはじめに、家族にそう宣言して始めたのよ。亭主？ 四十八才。

最初の日曜、飯はまだか、なんてノソ台所へ出てきて、ああそうだ、俺が作るんだっけ、だって。

今では息子と二人、ラーメンにヤキブタとモヤシを入れてチャーシューメン、いやもやしノバだ、なんて、結構リクリエーションになっているみたい。私の方は、食事の世話が一食ぬけて楽というより、何で自分ばかりがいつも働いているかなければならないのか、っていうイライラがなくなつて、気分がぐっと違うんです。

（S・M）

（地方分権を実行）

うちは主人がまめなたちで、庭仕事から、子どもたちをお風呂へ入れるのまで、さっさとやってくれるのだけれど、私も家事はなるべく子どもたちに分担してもらうようにしています。家族の一員として当然でしょ。

天皇の后妃たち

和田好子

元明天皇の和銅五年（七一二年）に成立した古事記は、日本最初の史書であるが、そのつもりで読めば奇怪な話が沢山発見できる。神功皇后といえは、私達のような戦中派にとっては、男装して朝鮮征伐（当時の語をそのまま書いた。）をした勇ましいお后で、彼女は亡くなった夫天皇に代って、戦争を遂行し勝利をおさめたと聞かされた。現代の女子大生は神功皇后とは「天照大神の奥さんじゃなかったかしら？」などというそである。男装の麗人とレズはつきものではあろうが、昭和ひと桁生まれには思いも寄らぬ発想である。

古事記にあらわれた神功皇后の姿は、このどちらとも違っており、それはずいぶん奇妙なものである。

彼女は名を息長帯日売命（おきながたらしひめ）といい、帯中日子（たらしなかつひこ）の天皇（仲哀天皇）の正妃である。古くは天皇の正妃となるものはすべて皇族の婦人であった。ごく稀な例外（奈良時代の光明皇后以前には唯一人）を除いては、天皇家以外の家から、正妃が出ることはなかった。勿論オキナガタラシヒメは皇族で、父は開化天皇の曾孫という。古事記は彼女についてまず、「神帰（よ）せしたまいき。」と述べている。神帰せするとは、霊媒の能力があったということ、神が彼女に憑いて、神託を伝えたのである。夫仲哀天皇は、穴門の豊浦の宮（山口県豊浦郡）または筑紫の香椎宮（福岡県）に「ましまして、天の下治（し）らし

めしき。」といわれており、つまり当時そこに帝都があったのである。その香椎宮において、天皇は戦争の準備をし、熊曾（くまそ）の国を討とうとした。熊曾は北九州にあって、天皇家に従おうとしなかった大勢力である。そして戦争の前途を占うため、皇后を霊媒として、神託をきいた。天皇と皇后と、建内宿禰（たけしうちのすくね）大臣、この三人が、庭にいて、天皇は神おろしのための琴を弾いたのである。さ、庭とは神の託宣を乞う清場（さやにわ）のつまった語で、必ずしも戸外を意味しないらしい。とにかく、そこは灯をすべて消して、暗黒であった。闇の中に単調な琴の音がひびくことしばし、神は皇后に依って、こう語る。「西の方に国あり。金・銀をはじめとして、目のかがやくさぐさの珍らしき宝、多（さ）にその国にあり。吾今その国を帰せたまわむ。」熊曾などと戦争をしないで、西方の国へ攻めていけ。そこにはたくさん宝があるぞ。吾（神）はお前にその国を降服させて与えよう。

こういう有難い神託があったのだが、熊曾との一戦を決意して、そのための有利な神託を願っていた天皇は、意外さのあまり、こともあろうに神に口ごたえをした。

「高きところに登りて西の方を見れば、国は見えず、ただ大海のみ。」

西の方は海ですよ。山にのぼって西の方を見たことがある

が、国なんかありやしないですよ。

そして、「いつわりをなす神」、うそをつく悪い神が悪いんだ！といって、神降ろしの琴を弾くのを止めてしまった。これを聞くと皇后に依った神はひどく怒り、「およそこの天の下は、汝（いまし）の治（し）らすべき国にあらず。汝は一道（ひとみち）に向いたまえ」

お前のようなヤツに、国を治める資格なんかないのだ。一道（あのよ）へいってしまえ！

恐ろしい託宣である。驚いた建内大臣が、「恐（かしこ）し、わが天皇（おおきみ）、なおその大み琴あそばせ。」といさめたので、天皇は再び琴を弾き始めたが、それは「なまなま、つまりいい加減な弾き方であった。大事件はたちまち起った。「幾時（いくた）もあらずで、み琴の音聞えずなりぬ。すなわち火を挙げて見ればすでに崩（かむあが）りたまいぬ」暗黒の中で、琴の音は絶え、火をともして見れば、天皇は死んでいたのである。

大騒動になって、国中のけがれを祓（はら）うことにし、国ぐにから「大奴佐（ぬさ）」、つまり神事のための費用をとり立て、「生剝、逆剝（けもの皮をはぐこと）、あはなち、溝埋め（田のみぞをこわすこと）、尿戸（くそへ）（くそをすること）、オヤ婚（たわ）け、コ婚け（近親婚）、馬婚、牛婚、鶏婚（以上獣婚）」など、罪という罪を集めてはらい清める「国の大祓」を行なった。

それがすんで後、建内大臣はさ庭を設け、暗黒の中で再び皇后を霊媒として神託を乞うたのであった。皇后はいった

「およそこの国は、汝命（皇后自身を神が指していた）の御腹にます皇子（みこ）の治らさむ国なり」

皇后は妊娠中であつた。彼女に憑いた神がまず主張したことは、腹中の子の皇位継承権であつた。

さらにそれを権威づけて、

「こは天照大神（天皇家の祖神）の御心ぞ。今まことにその国（西方の国）を求めんと思ほさば、天神地祇（あまつかみ）につかみ）、また山の神、河海のもろもろの神にことごとみてぐらを奉り、わがみ魂を船の上に坐（ま）せて、渡りますすべし」

そこで大臣は戦争の準備を熊曾討伐から朝鮮侵略に切りかえ、皇后とともに「船を並（な）めてわたり出で」「新羅の国に押しあがりて」、降服させ、日本の神を祭って、領有をあらわす杖を王家の門前につき立てた。

以上が古事記のしるす神功皇后朝鮮征伐のいきさつである。古事記は史書には相違ないけれど、必ずしも史実を記したのではない。当時史実と考えられたにしても、それは現代の科学的検証に耐えないばかりか、まったく質の異つたものであつて、むしろ当時の人びとの思想を反映した、創作といつてよい。

神功皇后の伝記にも、いささかの史実は混じっている（朝鮮侵略は事実である。）が、古事記の性格からして、すべてを事実とすることはできない。

密室殺人を思わせる、ふしぎな神降ろしの話は、天皇の急死をめぐって、そのような想像を、当時のひとびとがしたと

いう事実、史実以上の深い意味があるのである。

「神帰せしたまいき」。皇后オキナガタラシヒメは、とくに神よせの能力があった、ということではない。古代、婦人が神帰せをするのは、ふつうのこと、日常のことであった。日常の仕事といってもいいかもしれない。神を扱うのは婦人の役割であること、あたかも現在、家事は婦人の役割というのと、あまり違わない状態であつたらしい。

古代、神はあらゆるところにいた。天にも地にも、海にも河にも、火にも木にも。それをまつて、社会と人生の安全を確保するのが、婦人の重い役目であつたのだ。彼女らの役割の内部に、男性を禁忌とする部分があり、現在でも沖繩の離島などでは、婦人たちが神を祭るために山へ入る行列を、男が目撃すれば死ぬと信じられ、彼女たちが村の路をねり歩くとき、男はあわてて家の中へ入るそうである。

神を祭る仕事は、母権制の太古から、婦人のものであったのだろうが、次第に男権が拡張されて、女が没落していった過程でも、それは手放されなかった。むしろ没落しつつ、ただ一つの女権として、それを欄んで放さなかったのではないかと想像される。

それさえおさえなければ、女は強いのであった。家々においても、家の神（祖先の霊）を祭るのは女なので、男が仕事を始めるさいには、それが農事であれ狩猟であれ、彼女を通じて神のことはをきき、それに従わなければならなかった。いかに女が感じやすい性であるとしても、そうそういつでも、神がかりになれるものではなく、神の名をかりて、彼女自身

の意志を男どもに押しつけることが、しばしばあったに相違ない。いわんや彼女自身がすでに判断を下している場合には、神が降りたもうのを待つことなく、降りたもうたふりをして、いいたいことをいったのであろう。

男がその神の正体を疑い、女に従わなかったために、罰を受けたという話は、多く伝承されているそうである。沖繩の離島の祭りでも、練りあるく巫女たち（祭りの間だけの巫女で現実にはただのオカミさんたちにすぎないのに）を、男がおそれて目をつぶって逃げかくれるのである。女に従わないと凶（わる）いことがおこる……。

神功皇后に憑いた神に、夫天皇が殺された話は、このような古代のものの考え方の反映なのだ。

古代の信仰がピラミッドのように、底辺の階層から積み上げられて、その頂点にのっていたのが古代の天皇の権力であったのだが、それが神によって権威づけられている以上、神託は乞われねばならず、その神託を国民に信じさせるためには、皇后が「神よせ」をしなければならなかったのだ。当時は誰でも、女が伝える以外には、神の言葉をきく方法はないと、思い込んでいたのだから。

古事記が書かれた時代には、すでに皇后のこのような役目は形骸化し、儀礼化していったと思われ、それが「神よせ」を、特定の皇后の能力のように、表現した原因であらう。

このように天皇の権力は、国民の信仰の上に、たくみに乗ることによって、はじめて有効であった。明治以来の忠君愛国熱、天皇制新興宗教ともいうべき熱狂的ふんい気は、一部

の支配階級が、目的があつて煽つたためであるにしても、おそらく国民の側に、煽られて燃え上る「信仰」が、もともとあつたのではないだろうか。

古代においては、その権力を支える大きな役割を、天皇の妻が持つており、それゆえに起るべくして起つた事故……仲哀天皇の奇怪な死は、そう解釈できるのである。

天皇の結婚は、神婚せする妻という、宗教的側面とともに、今一つ、より現実的な政略的目的を持つていた。天皇は古代の日本を分割し支配していた豪族の女（むすめ）たちと、次々と結婚して、彼らを統合していった。勿論天皇自体に力（武力）がなければ、結婚も統合も不可能である筈だが、その武力は結婚によつて、豪族の家の神を女とともに引っぱつてきてしまい、彼らの武力をそっくりいただくという、たくみな宗教的戦略によつて、築かれたものであつたようだ。結婚によつて、天皇の権力は雪ダルマ式に大きくなるのである。

このような妻は、背後の実家の勢力の大小によつて、待遇が違つたわけで、実家が大権力者であれば、彼女の妃としての地位も高かつた。

さらに、古代では皇族以外から皇后に立つものはきわめて稀だといつたが、その稀な一人、光明皇后以前にはたつた一人の、豪族出の皇后は石之日売命（いわのひめのみこと）、仁徳天皇の皇后である。

仁徳天皇といえは、楼に登つて民家のカマドの煙をながめ、その少なさに税を免じたという慈悲深い天皇であるが、彼の結婚生活を古事記はばかに詳しく書いてゐるのだ。

この天皇の結婚は、当時の人の興味を集める何かを持つていたのであろう。

彼はつぎつぎといろんな女性と結婚して、しかもことごとく失敗した。いつでも女が逃げてしまうのだ。その原因を、古事記は皇后イワノヒメが、「嫉妬（うわなりねたみ）」したためだといつてゐる。

「大后石之日売命、いたくウワナリネタミしたまいき。故（かれ）、天皇の使わせる妃（みめ）（皇后以外の妻。一夫多妻であるから、すべて合法的結婚である。）たちは、宮の中をもえ臨（のぞ）まず（立入ることもできない、の意）、言立（ことだ）てば（彼女らがかわつたそぶりでもしやうものなら）足もアガカに妬みたまいき」

アガカは、足ずりしてくやしがるさまである。その皇后の目をかすめて、天皇は次々と妻をむかえる……むかえなければならなかつたのだ。吉備（きび）の海部（あまべ）の直（あたえ）という豪族の女、黒日売と結婚したのは、吉備氏が鉄を採鉱し製煉する家柄であつたので、武器の調達上必要だつたと思われる。クロヒメのクロは、座（くら）の意で、神座を意味し、つまり「神婚せ」妻であつたのだろう。皇后がおおいに怒つたので黒日売はいたまらず、故郷へ逃げ帰つた。天皇としてははなはだまずい。吉備氏を怒らせまいとしたのか、「歌よみしたまい」。

「沖の方（へ）に 小舟運らく くらさやの まさづこ吾妹（わぎも）（いとしいわたしの恋人） 国（へ）下らす」

と詠んだところ、皇后はますます怒り、海辺へ人をやって、黒日売がすでに乗船してゐたのを、追ひ下ろして、陸を歩かせて帰国させた、と古事記は伝へてゐる。

一夫多妻制のもとの嫉妬は、現在のものとは違ふ。夫が愛する女なら、誰彼となく嫉むということはない。たとえば

よくある例だが、姉妹が一人の男の妻となれば、姉妹間に嫉妬はない。また地位の高い（実家の階級が高い）妻は、低い妻を嫉まない。低い妻も高い妻を嫉まない。妻の召使いの女たちは、おむね夫にむかって、性的に解放されており、夫が手をつけても、妻は嫉妬しない。つまり妻の地位をおびやかさない位置にある女たちに対しては、嫉妬しないのがルールであり、事実かなり平気であったようだ。皇后石之日売が「足もあが」に妬んだのは、彼女が豪族出の皇后であったことと関係があるのではない。皇族出の皇后なら、天皇が諸豪族の女と結婚しても、平然としていられたらう。しかし、ルールを破って成り上った皇后は、いつまた、どこかの豪族が彼女のごとくルール破りの皇后を送り込んでくるかしかないという、不安から怒りを発したのだ。彼女はなぜ皇后になれたのか、彼女の父は葛城（かづらき）の曾都毘古（そつびこ）といひ、神功皇后の重臣、建内宿禰の子であるという。曾都毘古は朝鮮侵略に活躍した人といわれるので、おそらく当時の天皇家は、侵略戦争によっておおいにうるおい、その任に当たったものも勢力を振い、結果が石之日売の立后ということになったのであらう。ずっとこのことだが、藤原氏が女をはじめて皇后にたてた時、（光明皇后）聖武天皇は石之日売を例に引いて、弁解する宣命（せんみょう）を出しているという。その際藤原氏は反対勢力の皇族代表、長屋王（ながやのおおきみ）一家をみな殺しにするという、恐ろしい強権発動をやって、ようやく女を皇后に立てたのであった。葛城の曾都毘古も、何をしたり知れたものではなく、その騒動が尾を引いて、皇后の嫉妬という形で表現されたのではあるまいか。皇后の嫉妬のはげしさは、葛城という豪族の威勢と、

その弱味を示しているのであらう。皇后の嫉妬は、皇族の女に対して発動しており、葛城家の力の大きさが知られる。仁徳天皇は皇位継承のとき、弟皇子宇遲（うち）の和紀郎子（わきいらつこ）と紛糾があった。父天皇は和紀郎子に皇位を与えようとしたので、兄は身を引いて弟にゆづった。古事記には兄弟が互いに継承権をゆづり合った美談がでているが、現実には両皇子をそれぞれに推す勢力の対立と妥協があったのだらう。結局は、和紀郎子が早世したために、仁徳天皇の即位となったのだが、和紀郎子側の人びとにとっては、あきらめきれないものがあったに違いない。それが天皇と、和紀郎子の同母妹、八田若郎女（やたのわきいらつめ）との縁談になった。（当時は異母きょうだいの間の結婚は、ふつうのことだった。）天皇としても和紀郎子に義理があるから、やむを得ず、皇后が紀の国へ、公務で出かけた留守に、結婚を強行してしまった。八田若郎女は皇族であるから、皇后にとっては強敵も強敵、多妻制の下でもこういう場合は嫉妬がむりのないこととして、社会的に公認され同情されるほどの事態である。怒らずにいられようか。彼女の公務は、「御綱柏（みつながしわ）」の葉を採りにいくことで、この柏は宮中の宴会に、食器として用いられるものである。その帰途、情報が入った。「天皇は、このごろ八田若郎女と婚（まぐわ）いしたまいて、昼夜戯れ遊びますを、もし大后はこのこと聞しめさねかも、かく静かに遊びいます。」という話が、おくれてきた侍女によって伝えられたのだ。皇后は「いたく恨み怒りまして」、採ってきた御綱柏をことごとく海に放りこみ、難波（なにわ）にあった皇居へは帰らず、淀川をさかのぼって「山代（やましる）の国」（京都府）に行き、そこに

腰を据えた。家出であり、ストライキである。天皇があわてて迎えにいった、歌を詠むやらあやまるやらして、ようやく帰ってもらった。葛城家を怒らせるわけにはいかないのだった。八田若郎女は結局名ばかりの結婚に甘んぜざるを得なかった。天皇は彼女と同棲できなかったのだ。彼女の歌を古事記はこう伝えている。

八田の一本菅（ひともとすげ）は、ひとり居りとも 大君しよしと聞（きこ）さば ひとり居りとも

実家の勢力を振りまわして、勝ち誇る皇后は、古事記にはいささかにくたらしいイメージを留めているが、万葉集に二首のっている彼女の歌は、なんともうつくしい恋の歌だ。

秋の田の 穂の上に霧（き）らう朝がすみ いづべの方にわが恋い止まむ

かくばかり 恋いつつあらずは 高山の 岩根しまきて死なましものを

だいたい高貴の人の歌は、公的な性格があり（儀式などで詠む）、代作も多いらしいし、これをただちに、石之日売皇后の個性を表わすものと見ることはできないが、一読彼女のにくたらしい肖像を、描きなおしたくなるではないか。

神を帰せる妻、豪族の富と力を背負った妻………天皇の結婚はつねに公的であり政治的であった。その権力が妻によって支えられた程度は、ふつう想像されるよりもはるかに大きい。結婚によって獲得された権力といってもよいくらいである。天皇は有利な結婚しかないし、許されないし、それによって強大になってきた。万葉集や古事記に、わたしたちはい、天皇や后妃たちの人間性を見、その個性を想像しがちであるが、美しい恋歌も、伝わっている以上は何かの政治的

必要性を持っていたのだ、と見るほうが当たっているように思われる。天皇の結婚、天皇の恋とはそういうものなのだ。

さて、古事記の時代から千数百年を経た現代でも、天皇制は健在であるが、天皇の結婚は変ったであろうか。

尊皇思想が朽ちようとする江戸幕府旧体制にむかって、嵐のように吹き起った維新動乱のさ中、行なわれた明治天皇の結婚は、平安時代以来の伝統に従って、五摂家の女（五摂家は藤原五家。摂政・関白となる資格を持つ家柄）とであった。大正天皇の結婚はその延長線上のものといえるが、皇后節子は九条家の女（今上天皇が久邇宮家の女と結婚したのは、天皇家がかつてない強大な力をもって、対立する豪族もなく、実権を握る摂関家も幕府もなく、日本を統一した時代であったことと、無関係だろうか）。

さらに最近皇太子が、ブルジョワ階級の女性と結婚したのは、第二次世界大戦後、新憲法のもとで、日本が名実ともに近代化した資本制社会になったことと、対応してはいしなないだろうか。天皇は常に時代の実権を握る階級と、婚姻関係を結ぶことによって、天皇制を維持してきた。女を后妃とした実権派は、国民に深く根付いている天皇信仰を利用することで、支配権を強化したのだけれど、はたして利用されたのはどちらであったか。両者の間には虚々実々の緊張関係があった。これは太古以来かわらない、日本の支配権力のパターンだ。

それでは次の時代、いったいどのような階級から、天皇は皇后をむかえることになるのだろうか？ また何者が、女を天皇の后（わいふ）として捧げることになるのか？

天皇制の運命は、ここにかかっていると思われる。

あの日、の天皇

近藤 緑

私は、一度だけ天皇を見たことがある。あれは、戦後もないある秋のことだった。疎開先の長野県に、天皇が農村の視察にいられたのである。

当時「テンノウはなぜ、ああそうと全国をまわらねばならないか」などといわれたりしたように、それは国内を宣無しようにするアメリカの占領政策の一つであつたに違いない。

秋の刈入れを視察することだったので、女学生だった私は放課後すぐに予定の場所につけた。すでに田圃の中に人の輪ができており、中央に黒い背広服の天皇が立って、村の顔役連の説明に何やらしきりとうなづいていた。農道にはジープが止められ、若いMPたちがガムをかみながら談笑していた。

私は人ごみの中に父と兄とを見つけた。二人の周囲だけが、まわりの熱狂ぶりからとり残されているようで、私は何故か気軽に走り寄ってはいけなかった。私の

父は、退役の海軍軍人であつた。戦時中は軍需工場の顧問などをしていたが、かなり前から「もう、日本はどうもならん」と呟くような人間だった。その父にしては出来すぎた気性をもって生まれた兄は、少年の頃から陸軍を志し、念願通り士官学校に合格した時には天下をとったような喜びようだった。しかし、気力だけでは初心を貫くことはできず、胸部疾患となつて入院したり、また復学したりして

いるうちに、終戦となつたのである。戦後、ボロボロのようになつて帰された兄は、疎開地のタケノコ生活で栄養も医療もままならない中、急坂をくだるよう衰弱していった。最近では体温も八度を下ろすことはなく、血の気のない寝顔には死相さえただよっているように見えた。その兄が、こざっぱりと着物を替え、同じく古ぼけた背広を着こんだ父に腕を支えられて、じっと天皇を見つめて立っていたのである。

かつて、陸軍士官学校の校庭に、白馬にまたがる大元帥陛下として拝んだその人である。病みおとろえた身体で、地に堕ちたその人を見つめる兄の心中はどんなであつたろうか。また、父にとつても明治末の江田島生活は、青春のロマンにみちたものだったと思う。同期の人々の多くは戦死し、残った者は戦犯として裁かれた。父は軍人としては落伍者だったために生きながらえて、この日、病児の腕をとって人垣にまぎれて天皇を見ることにまつたのである。

安曇野の秋はつめたく、雪の常念岳から吹きおろす風が身内を吹きぬけていくようだった。翌年の春、兄は血を吐いて死んだ。



私は昨年、息子を亡兄の母校であるH中学に入れた。かつては軍人校長の下、軍国主義教育の最たるものであつたその学校が、今はすっかり民主化されており、憲法と教育基本法に基づく教育をうたっていることを知ったからである。私立学校だけに、亡兄の旧師が、また同級生が在職しており、三十数年たった今も、亡兄

のことを記憶しなつかしんでくれた。

いま、PTAの一員としてその学校の教育を考えると、私は亡兄の亡霊がともにあるような気負いを感じる。息子の学校が、ふたたび「君が代」を歌うことのないように、これからも見とどけていかねばならないと思っている。

「箱入り」天皇

三矢 久子

昭和五十年五月植樹祭が滋賀県にありまして天皇陛下、皇后陛下お揃いでおいでになりました。天皇陛下を目の前に拝顔いたしますのはここ数年なかったことでありまして、ほんとうにその日をお待ちいたしました。勿論戦前の天皇と戦後の天皇とは私にとりましてまるで神様の天皇から人間天皇に替わられて戦前では考えられなかったことであります。

私の小学校の頃はほんとうに天皇陛下は生きた神様だとおしえられて教育されました。天皇陛下をおむかえする前日はお風呂に入り散髪をして身をき

★

テレビで見る天皇も老いた。この人はつねに傀儡でしかなかったのであろう。せいぜい地方の何流大学かの生物学教授といった器なのだと思う。それにしても、なぜ、天皇の息子も孫も、生物学にばかり興味がかたよるのだろうか。

れいにしておむかえました。小学生の頃の想い出は、小学校の校門を入ったところに御真影と言って天皇陛下と皇后陛下のお写真をお納めしてある場所の前で最敬礼をして登校下校したものであります。それから新聞に天皇御一家族の方々のお写真が出るとその写真を切り抜いて神棚に上げたことをおぼえています。それは新聞はお弁当の包紙にしたり物品を包んだりするので、天皇に対して不敬に当るので写真は全部切り抜いた様におぼえています。皇族の方々には私たち国民とは別の世界に住んでおられて雲の上の方だと心から信じておりました。

現在でもまだまだ私たちとは別の世界に住んでおられますが、でも戦後は人間天皇らしくなられた様であります。

昭和八年、皇太子誕生の頃に「絵本」「菊坂」の名作を書いた田宮虎彦が、裕宮誕生に際して「将来はぜひ、社会科学を学んでほしい」といったのを思い出す。歴史を見通すしっかりした眼をもたなかったら、皇室も、またそれ以上に国民が不幸なことになりかねない。 (投稿)

世間ずれのしていない娘さんのことを「箱入り娘」といいますが、天皇陛下も私から見ましたら、ガラス張りの「箱入り天皇」といいたいところで。天皇陛下が「今日は赤ちゃん」のメロデーの歌をとてもおよろこびになられて何度もおききになられたとのことで子供さんの大好きな天皇様だということを感じられます。現在七十五才になられた由、ほんとうに健康に恵まれています。学者天皇の現在、私の目から見まして、終戦後はいろいろと精神的に御苦勞なされたことでしょうが、昭和五十年の御代になられて海外親善旅行にもお出かけになられ益々お元気ではございます。 (投稿)

昭和の御代の繁栄を祈ります。

(投稿)

「天皇」の名において 中野 桂子

昭和二十年八月十五日、その日突然、「天皇」はマイクの前に立ち、日本が負けたと通達する。それを信ずるまでに私はどれだけの時間を必要としたことか。そしてそれが真実であることの確認を得たとき、急に足もとの大地がぐらぐらとくずれて行くように感じた。「何といっても「地震」が一番こわいですね、自分の足場が一挙にくずれることなのですから」ある教師の言った言葉を想起する。

空虚な時間ののち、自分の足掻きから見つけ出した小さな生きる可能性を育てようと息づきはじめると、次にはとまどいばかりが、心を埋める。それは突然訪れた「ある日」までの長い長い間「天皇」によってすべてが支配され、「天皇」に倚っていれば安住していられた時間。それはある意味で女の妻の座と通ずるものがある——主体性のない時間と空間に、急に終止符がうたれたため、いっときに生じた混乱のせいだった。

学徒動員は解除され、私は「女学生」

に返る。「女学生」——何と遠い昔の呼び名であつたろう。だから「女学生」に返ったとは名ばかりで、その時点における現実には「女学生」などありようがなかったと思う。

太平洋戦争が始まって半年ばかり経った頃から制服のネクタイは贅沢品として剥がれた。スカートは非生産的と、モンベに替った。毎日教練と奉仕作業の合間に授業があった。英語は敵国語であつたから、はじめはそれでも随意科目であつたのに、いつか教科のなから消えた。上級生が動員学徒として県外の軍需工場へ行く。日の丸の小旗をふり乍ら、膳所駅へそれを送りに行く。そのうちに「ああ私達もお国のために働きたい」というムードが生じてくる。そして遂に動員令をうける。敗戦の八カ月前、毎日仕事に化身する。作業服にモンベと白鉢巻。仕事が軍需品の製作であることが「天皇」へのつながりでありそこに生甲斐がある。そして「女学生」は消えて行

く。広場に集まれば、時間待ちに「折敷」(腰をおろして片ひざをたてて坐ること)をし、駅での列車待ちにもこの慣習を忘れない。毎日十数人が「天皇」の名において教官に頬をなぐられても泣くこともないつらだましい。口ずさむのは軍歌ばかり……。

「天皇」という支えがなくなって突然「自由」が訪れる。平和、民主主義、一体それはどういうことなのか。学校には何もなかった。机もいすも、教師も教科書も。机やいすは軍需工場の作業台になってまだ帰っていなかった。教師は生徒を指導する何もかも持たず、何日かして生徒が手にした教科書なるものは全紙を折疊んだ見にくい活版刷りの小さな文字が並んだ新聞紙のようなものであった。ある日教師は教室でざわめく私たちに「みなさんは自由です。みなさんのすることはみなさんで決めて下さい」という。まず級長の選挙からはじまる。今までの官選の級長は隅へ追いやられ、都会から疎開してきたオシャレな女の子が級長になるというクラスがある。

「みんなもう少し考えなければ」とい

う若い男の教師に対してその教師の授業拒否をするため教室の扉の内側にバリケードを築く。他の教師はこのことに対して何も言わない。「天皇」なる道標が失われたから。

無条件降服をした日本の厚木飛行場に、まずマッカーサーが降りる。連合軍の進駐がはじまり大津にも進駐軍が入ってくる、学校は「みなさんは親の方針に従って、逃げるなり何なりして下さい。それについては欠席にはしませんから」と言う。その時はじめて私は漠然と女性を意識する。全く紳士的な進駐。私は進駐兵に敵意を感じるところか敬意を感じる。巨大な物量が、整然と静かにこちらへ向って進んでくるなかに、人形のようにおかれた丈高な進駐兵が物珍らしげに私たちに視線を投げる。その光景にぶつかって「天皇」は完全に瓦解した。

昭和二二年三月「その日」から一年半ばかりたった時、私は旧制高女五学年を卒業する。その後男女共学の高校が続いた。一步踏み出した社会は混沌としていた。外地からの引揚げ、パンパンガール……

そのなかで「天皇」はホーキであった。「天皇」の通る道は次から次へと美しくなっていた。かつて「天皇」の通る道はなかったから。日本人の心はうつろい易いのか、「天皇」の名において自分たちが何をしたのかはすでに遠くに去ったのだろうか。「人間天皇」はいつも多くの歓声に迎えられた。私には「人間天皇」は奇妙な存在であった。許しがたい存在であった。その後、正田美智子とい

うお嬢さんが「天皇」の息子と結婚した。また多くの人が歓声をあげた。美智子という人は私よりよほど若かったから、その中に育てられてきたものについて私は理解するすべを持たなかったが、私はあきれた。同じ頃、同名の美智子という女子学生が国会構内で、警官に殺された。彼女は六〇年安保のデモに参加していたのだった。

(投稿)

天皇のアメリカ訪問

樺 逸子

皇統連綿の天皇家にしては珍らしく長生された現天皇は、昭和五十年、戦後卅年目にして、気の遠くなるような庞大な陳容で、アメリカへ遂に出かけられた。

止まる処を知らず破滅に追いやったことだが、一個の人間としての天皇には神の前に罪はなくとも、国の最高の君主としての責任は厳然たるものがあつた筈です。

卅年前には、日本はアメリカに戦争を仕向けたのだが、それもハワイ真珠湾の開討の奇襲戦法に出た卑劣さは、その時女学生の私にとって実に屈辱なおもいだったことは生涯忘れないが、何にせよ「天皇裕仁」自らの号令は、玉音と称して当時の日本国には絶対なものとして

何と云っても、地球世界に、日本が大東亜戦争なるものを起こした事で、天皇陛下のために、と征き、散り果てた兵士は勿論、戦火のもとで、悲惨な死に追いやられた幾多の人間に対する「天皇」としての懺悔があるなら、世界各国

の王侯族が、或は、大統領が、社交辞礼として是非御来遊を、と招かれても、亦それをする事が答礼であるにせよ、かつて一度敵国として身の程知らずに戦争を仕向けたイギリスやアメリカへ、天皇の行事として出向くなどは、心ある日本人をふみにじり、人間として、大人としてあまりにも不道徳であり、無節操に過ぎていると思うのです。天皇を退位され、個人の資格でなら、もっと御自由に、これ迄にでも御旅行は御随意ですが、今般の御訪米に於ても、日本人の上に立つ天皇が、あの様な行為で以て君臨して済まされているとお考えでは、神を知らぬ行ないだと見ております。

用意されたメッセージでは、いかにも戦争の事実で遺憾を表明した言葉を折り込んで、聞く者に感動を与えたかの如くでありましたが、私は決して、天皇御自身の発露からなるものである筈はないと思っており、恐らく敗戦、終戦時、かろうじて、「全体とまれ！」の号令ともいうべき詔勅を読まれた時、自分は死ななかつた、とお氣付の程度であつたでしょうし、痛烈な責任など心からお感じにな

られたように我々の前に思わせようとしなくてほしい。

人間天皇がもし本当に戦争は天皇の責任として心に留められるならば、あのような訪米など絶対に出来ないとは私は考えます。

天皇を日本領土の沖繩へも行かせない採配をして、皇太子御夫妻に代行させてあの状態が起こされた事でもありました。

私は今般、天皇がアメリカ行をされたが故に、日本マスコミの記者会見のインタビューにも応じさせないわけにはいかなくなり、これ迄、兎角、菊のカーテンとか、色々カムフラージュされていたのが、テレビのとらえた実況は、お膳立や原稿をお読みになるのではない、独自のおしゃべりが、如何にたあいのない程度であるかが明らかに見届けられた。

もうこの上は一日も早く天皇職をお止しになり、世界屈指の大富豪の天皇家の御一統は、御勝手にお過ごし頂き度いものです。



おねがい

戦後流行した「カストリ雑誌」という言葉を、ご存じでしょうか。カストリとは焼酎のこと。この強烈な酒を三合飲めば、酔いつぶれてしまふ。だから三号でつぶれるのがカストリ雑誌。

ところで「わいふ」です。これまでの会員、270人。皆さんが続けて下さったとしても、各号につき、五・四万の収入。かたや支出、印刷費だけで十二万。原稿料、取材費、連絡費はゼロの現在です。一号ごとに、七万円近い赤字は、まず三ヶ月でやっていけなくなる数字でしょう。「カストリ雑誌」という表現が空々しくともに身にします。

みなさんをお願いします。再出発の「わいふ」が、三号でつぶれてしまつては惜しい、とお思ひの方、どうかすぐ、会費を払いこんで下さい。誌代一年分千二百円、送料八四〇円です。それからもう一つ、どうか一人でも二人でも会員をふやして下さい。せめて500人になれば、当分やっていけるめどがつきそうです。

「わいふ」は、編集者だけでなく、読者のみなさんの参加によって作られている雑誌です。財政面だけでなく、投稿によつても「わいふ」を充実させて下さい。ハガキ一枚でも結構なのです。よろしく願ひいたします。

編集部

アマテラスのプレゼント

— 祭祀者としての天皇 —

亀山利子



天皇については、知っているようで知らないことばかり。象徴でありつつけるためには、ぼんやりした存在の方がいいのかしらん？ 「未知」こそは「神秘」なれ（？）。

それにしても、五年前の天皇訪欧には、思わぬ副産物があった。日本に紹介されたむこうの新聞の政治漫画に、大統領や首相と同じように、天皇の、いやヒロヒトの似顔絵がユーモラスに描かれ、諷刺されているその新鮮さ。新鮮と感じるところがくせものである。

諷刺漫画の主人公、さがり気味の眉ふとく、細ぶちの眼鏡をかけた、猫背の、なにか自信のありそうな、なさそうな小柄な老人を眺めていると、知らぬうちに、私たちの感覚にとって（理屈ではないもっと深いところで）、天皇論がどれほどタブーになってしまっているかを、痛感する。

「おめざめはなん時」から「ご趣味」に至るまで、あきれるほどの皇室記事の氾濫のうちにありながら、肝心のことを私たちはなにも知らない。

ここで少し、天皇のなぞ解きをしてみよう。

なぜ天皇家の人々には苗字がないのか。

——「皇室は絶対に尊厳なる貴種だから」「苗字は他の者と紛れないように区別するためにつける符号である。故に相対的地位にある人民には是非とも必要であるが、皇室は絶対的地位にあらせられ、他と紛れるような心配がないから、苗字をおつけになる必要がないのである」（注一）

天皇に戸籍はあるか——ない。しかし、「大統譜」「皇統譜」という、宮内庁書陵部が保管している、一般のものとは別格の天皇家専用の書類があり、そこに記入される。だから天皇と皇族は、戸籍法、住民登録法の適用をうけず、米穀通帳も健康保険証も、母子手帖も持たない。

選挙権や被選挙権はあるか——もちろんない。選挙法附則第二項「戸籍法（昭和二十二年法律第二二四号）の適用を受けない者の選挙権及び被選挙権は、当分の間、停止する」

天皇は税金を払っているか——予算を計上して給付される「内廷費」と「皇族費」には、所得税を課さない、と所得税法にきめてある。固定資産税や自動車税も払わない。課税対象となる資産を持ってないから。皇居、御用邸、牧場から七台の自動車にいたるまで、すべて戦前は皇室財産であったが、今は「国有財産」であり、「皇室用財産」という名義で、国から借用している。住民税は払っている。

天皇に自由はあるか。たとえば銀ブラをする自由、屋台で焼鳥とコップ酒をたしなむ自由——宮内庁長官は答える「……やはりすべての普通の国民と同じ生活をするということでは、ほんとうの象徴としての国民の尊敬を集め、親愛を得られることにはならない。……象徴としておすごしになるには当然負わなければならない、御義務であると思います。そういうことでは、何らわれわれと差がなくなってしまう」（注2）

なぜ、天皇、皇太子、皇太孫の成年は、国民一般や他の皇族とちがって十八才なのか——？

天皇に学問の自由はあるか。もし、ヒドロゾアなど海中微生物の研究ではなく、ロシア革命の研究家たらんと欲した場合、どうなるか。やはり皇居内に、歴史学御研究所ができていたろうか……。

天皇に信教の自由はあるか。万一クリスチャンになった場合、

伊勢神宮でわが祖先の靈に拝礼する行為と矛盾しないか……。

××××××××

ところで私は、不覚にも、神代の昔から伝わるという「三種の神器」は、今どき三C、カー、クーラー、カラーテレビなどの風俗語に解消してしまっているとはかり思いこんでいたのだが、今でもれっきとして存在していることを知って、正直、おどろいた。

もちろん戦前の旧皇室典範には「天皇崩ずるときは、皇嗣即ち踐祚し、祖宗の神器を承く」とあった。

思えば、三種の神器は、大日本帝国の「万世一系、神聖ニシテ侵スベカラズ」という天皇の權威を演出する、唯一の物的証拠（ただし、実際には誰も見たことがないし、証拠となり得る科学性もない）であった。せんじつめれば、たとえば太平洋戦争のわずか三年間で二百九十件にものぼったという不敬事件の、なりたちうるよりどころでもあった。

私など戦後派（？）には、三種の神器とはなんであったか、あらためて考えこまなければ、正体がつかめない。たしか、それぞれに由緒ある鏡と玉と剣……。

伝説にいう、はるか神代の昔、弟スサノオノミコトの乱暴狼藉をなげき怒ったアマテラスオオミカミ（天照大神）は、天の岩戸に身をかくし、世は闇になった。彼女がふたたび姿をあらわしてくれることをねがって、イシコリドメノミコトが作った八咫（やた）の鏡、この鏡と一緒に、岩戸の前の榊の枝にかけ

たという、八坂瓊曲玉（やさかにのまがたま）それと、スサノオノミコトが退治した八岐（やた）の大蛇の尾から出てきた天叢雲（あめのむらくも）の剣（のち草薙の剣という）。

「豊葦原の千五百秋（ちいおあき）の瑞穂国（みずほのくに）は、是れ吾が子孫（うみのこ）の王（きみ）たるべき地（くに）なり。宣しく爾皇孫（いましめみま）ゆいて治（し）らせ。行矣（さきくませ）。宝祚（あまつひつぎ）の隆（さか）えまさんこと、当（まさ）に天地（あめつち）と嗣（きわまり）なるべし」

アマテラスオオミカミは、孫のニギノミコトに、この神勅と三種の神器を授け、高天原（たかまがはら）から高千穂の峰に降りたさせた。これが日本の国のはじまりである。（天孫降臨伝説）

この三種の神器のうち、八咫の鏡は、アマテラスオオミカミを祀（まつ）る伊勢神宮の神体となり、草薙の剣は熱田神宮の神体である（この剣は平氏滅亡の時、祖母に抱かれた八才の安德天皇とともに海底に沈み、のち伊勢神宮の内宮である皇太神宮からあらためて献上されている。ふたゝびアマテラスオオミカミの意志によって授けられた、の意だろう）。この二つの神社が、皇室との特別の縁をほこるゆえんである。とくに、伊勢神宮に祀られているアマテラスオオミカミは、天皇の直接の祖先なのである。

戦前の教科書を、少し引用してみる。

「大神、瓊瓊杵尊に向ひて告げたまはく、『此の国は、わ

が子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆきておさめよ。皇位の盛なること、天地と共にきはまりなかるべし。』と。万世一系の天皇をいただき、いつの世までも動きなきわが国体の基は、実にここに定まれり」（註3）

「第十五 くわうだいじんぐう」

ここに年へたすぎの木のしげりあつた中にたつといおみやが見えます。このゑは伊勢にあるくわうだいじんぐうのおんありさまをうつしたものでございます。くわうだいじんぐうは天皇陛下のごせんぞ天照大神をおまつりまうしてあるおみやで、陛下にあらせられましてもつねにごたいせつにあそばされます。われわれ日本人はこのおみやをうやまはなければなりません。」（註4）

「明治神宮 参拝 神宮橋を渡りて、まつ仰ぐ大鳥居

に、菊花の御紋章を拝するかしこさ。南参道に入れば、夜来の雨に清められし玉砂利、さくさくと鳴りて、参拝の人々、あたかもいひ合はせたるごとく、足並みのおのづからそろふも尊く思はる。……大木は参道の右左を始め、到るところすき間もなき木立となりて、神域いよいよ厳かならんとす。……すべて清らかに厳かなり。拝殿に進み、明治天皇、照憲皇太后御二柱の神の御前に、うやうやしくぬかづく。……」（註5）

さて、新憲法下では、さすが神器という言葉は法律にのって

いないが、皇室経済法第七条に、こうある。

「皇位とともに伝わる由緒ある物は、皇位とともに皇嗣がこれを受ける」

「由緒あるもの」とは、宮中三殿、三種の神器、などをさすという。

三種の神器をきっかけに、天皇の周囲をさぐっていくと、司祭者、神々の直系としての天皇の姿、行為が、予想したよりずっと濃厚にあることに気づく。しかもこの要素が、あまり国民に知られていないのはなぜだろう。昔のように天皇家の宗教性を伝えることの反省と警戒のせいなのか、それとも、天皇家のよってたつ根拠がこの程度のものなのかという権威の失墜をおそれるのか——。あるいは隠すことが神秘なのか。宮内庁やマスコミがせっせと演出している、少しも特別でない、一般市民と同じような「しあわせな皇室御一家」像の中に、この部分は出てこない。「革命と皇室」の関係とか、「税金で暮している」ということなどを正面きって話題にするのは、マスコミ界ではもはやタブーらしいが（おそらくそのために、宮内庁総務課から「一年間の出入り禁止」を厳命された出版社がある）、それに加えて、祭祀者としての天皇の姿を知らせるのもタブーではないか、と私は推察する。宮中賢所（かしこどころ）に、昔ながらの礼服、黄櫨染（こうろうぜん）の袍（ほう）の姿で、祭をとりこきり、祈りをささげる天皇の姿は、ついで写真で公開されないのではなからうか。天皇家のプライバシーだから、ですませてしまっているのだろうか。

皇居には、宮中三殿といわれる建物お社がある。戦前なら、いわば皇居の中核部分というところだろう。高い土塀（どべい）とうっそうとした大樹にかこまれた、神域（しんいき）だそうである。

三殿のうちでも、もっとも「尊貴」なのはアマテラスオオミカミを祀（まつ）ってある賢所で、さきほどの三種の神器のひとつである鏡が神体である（正確には、伊勢神宮にある八咫の鏡の分身の鏡）。ほかに、神武天皇から大正天皇まで百二十三代の天皇とその皇族が合祀（ごうし）されている皇霊殿と、天神地祇（てんしじき）、いわゆる八百万神（やおよろずのかみ）を祀った神殿とが、宮中三殿を構成する。

ここで、大小とりまぜ年間数十回に及ぶ祭式がおこなわれている。

天皇、皇室のありようのうちで、この祭式が占める割合は、天皇家の使用人のメンバーを見ればわかると私は思う。国が負担する皇室費用には三種類ある。（一）天皇及び天皇一家の生活費（二）内廷費、（三）国家の象徴、機関としての公務をおこなうのに必要な活動費、施設費（四）宮廷費、（五）天皇の親戚としての品位をたもつために皇族に支給する経費（六）皇族費、である。

これらのうち、内廷費が、「最高の公務員」である天皇の、いわば俸給（ほうきょう）であって（昭和四十九年度、一億三千四百万円）、七人家族の生活費と個人的な二十五人の使用人の人件費にあてられる。その二十五人のうち、十一名までが祭りごとをおこなう掌典（しょうてん）・内掌典なのである。（あとは、趣味の生物学関係の職員四人、床屋、皇后の美容師など十名。）皇室祭祀の一切をつかさどるこの掌典職は、戦前には宮内省の一

部局であったのだが、戦後は、皇室の私的使用人になった。なん度も書くが、この皇室祭祀は、予想以上に多い。元旦の四方拝からはじまり、年に十数回の大祭には、天皇は古来の儀服である束帯姿で、「お告文」を奏し、自ら祭典を行なう。祭典は掌典長にさせ、天皇は拝礼するだけという小祭も、年に十数回あるらしい。

侍従は書く。



「……賢所のお祭は、元日の早朝の四方拝からはじまって、一年にはずいぶん大変な数になる。

四方拝は朝の五時半だから、元日お起きになるのは四時頃、御潔斎になって、綾綺殿という賢所のお召替所で、黄櫨染の御袍（註6）という昔ながらの御装束におかえになって、四方拝（註7）つづいて歳旦祭（註8）。このふたつが終ると、東の空がしらみはじめる。三日の元始祭。二月十七日の祈年祭、これは豊作を祈るお祭。二月半ばの寒天に、陛下は欠かさず神に祈っておいでになる。このようにして、毎月大体三回は御拝になる。

お祭としての一番の大物はなんといっても新嘗（にいなめ）祭。勤労感謝の日だが、これは前記の祈年祭の裏をなすもので、（純白の祭服という装いの天皇が）新穀をそなえて、御自身で御配膳をなさって神慮をおなぐさめになる。夕方六時から八時過ぎまでを夕（ゆうべ）の儀といい、間ちょっと切れて、十時から零時すぎまでを暁の儀という。

徳川時代は、祭祀は朝廷の重大な行事だったが、それはほか

に大きなお仕事も無かったからで、当然ともいえるが、明治以後では、今の陛下がお祭を最もよくおつとめになるといってさしつかえない……」（註9）

さらに、毎朝必ず、侍従に代理の拝礼をさせている。

「われわれ侍従は毎日一人ずつ当直をする。吹上（御所）につめているが、夜が明けると（宮内）庁舎の方に帰り食事をし、賢所に毎朝の御代拝をつとめる。これがすむのがおよそ九時……」（同前）

満州からの引き揚げの途中、二才の娘を栄養失調で死なせてしまった母がいる。その母は、娘の遺体が埋められる時、「私の娘を返せ」と声をかぎりに叫んだという。「私はあるとき、誰」にむかって叫んだのだろう。「誰」のなかに『天皇』が入っていたのだろうか」と、今でも思いだすたびにからだが熱くなってくるという老女。

父親の海軍葬のかずかずの弔辞をききながら、そのうやうやしさと文脈から、天皇こそ父を死界へ追いやった元凶であるとさった当時八才の少女。

この二人にとつての天皇と、いつも金ピカの軍服にサーベルで身をかためていた大元帥陛下、孫たちにかこまれた好々爺、篤実な老生物学者はみな同一人物である。さらにまた、束帯姿であかつきに祈る天皇、ことあるたびに先祖たるアマテラスオオミカミに報告の祈りを捧げる天皇も、やはり同一人物である。

確かに戦前とはちがう。戦前は国家と神道は密接にむすびつ

いていた。国家は神社に対して、布教の奨励だけでなく、財政援助さえしていたし、国家の大事はそのつど、アマテラスオオミカミに報告された。明治憲法下、天皇は国家最高の祭主として、祭祀大権をもっており、さきほど引用した教科書でもわかるとおり、国民精神総動員の道具の中核だった。大東亜戦争大狂奏曲のメイン・モチーフであった。だから昭和二十年十二月には、ポツダム宣言の線にそった民主化の措置のひとつとして、占領軍による国家神道解体令が出されたし、これによって宗教的要素をもぎとられた天皇（制）は、「朕は神ならず」「朕ハ爾等國民ト共ニアリ。常ニ利害ヲ同ジウシ、休戚ヲ分タント欲ス。朕ト爾等國民トノ間ノ紐帯ハ……單ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ」という人間宣言を発しなければ、戦後をはじめることができなかった。

天皇家においていくら祭祀が盛んであっても、それは天皇家のブライヴアシーに過ぎないという反論もある。われわれの間に、特に法事に熱心な家もあれば、熱烈なクリスチャンの家庭もあるのと同じだというのである。

しかしどうみてもブライヴアシーを超えていると思われる点がいくつかある。

昭和三十五年十月の国会で、伊勢神宮に伝わる鏡（アマテラスオオミカミの御神体）は天皇のものか、それとも伊勢神宮という宗教法人のものか問題になった。当時の池田首相の答弁しについて、「その起源、沿革などから御鏡は天皇が神宮に授けられたのではなく、祀られたものであり、皇室経済法第七条の皇

位とともに伝わる由緒あるものとして神宮に所有権があるとは認められない。したがって神宮が、自由に処分することもできない。

三種の神器とそのよりどころとなる神話は、こうして今も生きているし、皇室と伊勢神宮の特殊な関係も国会で堂々と宣言されたことになる。

皇室祭祀の大祭のうち、春季・秋季皇霊祭（ふつうにいうお彼岸の中日）と新嘗祭には、内閣総理大臣、国務大臣、両議院議長などの要人に参列の案内状が出されている。天皇のアマテラス以来の先祖を祀る祭りに、なぜ内閣要人が出席する必要があるのか。モーニング姿の内閣総理大臣が（個人としてではなく、総理大臣として）うやうやしげに伊勢神宮にもうでるのも考えてみればおかしい話である。戦前は、天皇は、「皇族及び官僚を率ゐて」大小祭にあたったという事実をおもいおこすのも無駄ではあるまい。

ここまで書きすすんでくると、今まではほとんど気にとめなかった靖国神社（国営化）法案をめぐる論議が、ぐっと真近くせまって、私の関心の土俵の中に入ったのを感じる。

子女の結婚だけでなく、ヨーロッパ旅行、アメリカ旅行など、一家庭としての天皇家の大事件（実際にはいつも家庭的事件以上のねらいと影響をもつのだが）のたびに、天皇の特別車輛を仕立て、厳重に順序のきまつた自動車列をひきいて、アマテラスへの報告の旅にでかけるのも、ある種のデモンストレーションになるのではなからうか。

重箱のすみをつつくような、といわれるかもしれないが、と

にかくなにかうさんくさい。

以前「教科書のなかみがかわっている」に書いたように、まさかと思われるような天皇の地位の強調が教科書検定にみられるし、君が代の押しつけも、先日報告した通りである。高校社会科の倫理教科書に、

「天皇の存在は、天照大神がこの国土のすべての神々を祭る神として国土の統一をするように、日本人の統一を象徴するところに意義がある」

という記述も登場した。

マスコミ界の菊タブーは、想像以上のものがあるらしい。宮内庁より「お貸し下げ」の浩宮の写真のをせた隣りのページに、たまたま女性下着の広告がのった。浩宮の視線が下着のモデルを見ているから、「不注意だ」と宮内庁からお叱りがある、というようなエピソードもあるそうだから、まして、記事、文章の内容にどれほどクレームがつき、自己規制がおこなわれているか、察しがつく。

天皇制批判は、言論の自由の原点である、という見方に、私は深くうなづく一人である。

註1 「解義国体の本義講話資料」田制佐重著 昭和十四

年敬文社刊

註2 昭和三十四年 第三十一回国会内閣委員会速記録よ

り。

註3 第三期国定教科書「尋常小学国史」

註4 同右 「尋常小学修身書卷三」

註5 第五期国定教科書、小学六年用国語。昭和二十年の敗戦の前後に使われ、小学生が墨でぬりつぶした部分である。

註6 はぜの木の前汁などで染めた黄茶色の、束帯姿の時に着る上衣。

註7 宮中三殿の庭に屏風をめぐらして設けた御座に進み、伊勢神宮をはじめ、天神地祇（あまつかみくにつかみ）四方の神々および山陵を遙拝。

註8 四方拝につづいて、宮中三殿で、祖先や天神地祇の神霊を祀り、神助を祈る。

註9 入江相政「天皇さまの還暦」朝日新聞社刊

数々の参考資料のうち、とくに、藤徑準二「皇室事典」（毎日新聞社）及び、児玉隆也「君は天皇を見たか——テンノウヘイカバンザイの現場検証」（潮出版）の二書に多くを負っていることをつけ加えておきます。



天皇の給料
林慶子

天皇の生活費の歴史をさかのぼると、皇室は昔から固有の領地をもち、武家政治に入ってもその収入により生活が維持されていた。徳川時代には幕府がこれを収納してから内裏に支給し、臨時の費用は別に内裏から幕府に支弁を仰いでいた。

充分ゆとりのある額だったらしいが、「皇室のことは議会の関与干渉すべきことでない」の原則で「いったん決まった額はあ」とは論議を要せず毎年つづけて国庫が負担せよ」と余った金は蓄積されていったらしい。明治四三年の桂内閣時に四百五十万円と大巾に増額され、この額が敗戦までの三十七年間継続支給されている。当時の四百五十万円は、昭和四五年を百とした物価指数で換算すると、今の約千三百倍、五八億五千万円に相当する。

この國庫支出とは別に、帝室財産なるものが創設され、國が所有する物件土地等が統々と皇室財産に編入されていた。當時官有と皇室有との區別は不明瞭のままであったから、大量の國有山林原野等が皇室專用財産に編入されるのに抵抗がなかったようである。沢来太郎氏のように、多くの國の財産が皇室財産に移って行ったことに批判を加えた人は、ごく稀であった。

さらに皇室経済は、いつの頃からか、ヨーロッパ王室になら
って皇室自身で収入を目的とする事業に乗り出して行つた。事
業といつても、あらたな資金など必要なく、これまで次々と
皇室財産に編入されていた御料林の経営と、政府から移管され
ていた有価証券の運用で充分だった。これらの収入は、日清、
日露と戦争のたびごとに収益をあげ、大正六年には国庫よりの
受入額の四五〇万円をしのぎ、三年後には一千万円という飛躍
的好況ぶりだった。昭和二年、日本経済の大恐慌で木材界も不
況におそわれ、皇室事業も大いに影響されているが、昭和六年
勃発した満洲事変で回復し、戦局の拡大につれて活気づき、太
平洋戦争への進展と共に、大量の木造船や木製飛行機の材料と

して収益をあげ、敗戦の前年、遂にそのピークに達した。当時の金で二千八百万とも三百万ともいう信じ難い純益を得ている。その他、有価証券や債券による利潤も大きく、終戦時には日本銀行、正金銀行各二十万株以上、日本郵船、北炭各十五万株以上の大株主であり、その他の債券を合わせると三億円以上の大株主になっていたのである。当時の三大財閥、三井十一家、岩崎二家、住友家の財産を併せても八億八千万円であり、これに対し皇室財産は総額十数億に及んでいた（米司令部発表）。これら皇室財産は、天皇の自由な私有財産ではなく皇室という一つの財閥の性格として宮内省が管理し、宮内大臣がその責任者となり、天皇の考えによって運営されていたのだが、それにしても、この膨大なる富の蓄積は一体何の為になされていたのだろう。

さて、敗戦後、連合軍司令部により、皇室財産にも一般財閥と同じく、千五百万円以上は九割という超過累進課税率が適用され、財産税及び戦時特別税として政府に納入したので財閥の皇室財産は解体したことは周知の通りだ。財産税納入済の残る一割のうちから私有財産と認められたものは、身廻り品を中心とした生活必需品、若干の預金有価証券、愛用美術工芸品、新憲法の建前から公的なものに不適当とされた三種の神器や宗教上の施設等であり、それ等をのぞく残り全部は、憲法八八条発効と共に国に返し、それに対応して国が皇室費を負担することになった。

戦後の皇室費用は、内廷費、宮廷費、皇族費の三つに分けられ、内廷費は天皇一家の家計費で、交付後は直ちに私金となり、

一般人の給料と同じことになるが、大いに違う点は、所得税法第八条により課税されないことである。この内廷費は昭和二十二年時八百万円であったが、翌二十三年、インフレのため一挙に二千万円に増額、毎年ベースアップされ、昭和三十九年には、六千八百万円となる。

国の象徴、国の機関として天皇が公務を行うに必要な活動費や施設費は、当初は千五百二十四万円、二十七年には予算外に皇太子英国戴冠式出席費用一億一千万円が支出され、決算額三億千百万円に、三四、五年は東宮御所新営で五億となり、三十九年には二二億、四十年には三九億円という急カーヴ上昇ぶり、何となく明治の頃を彷彿とさせるものがある。

昭和四十年からの三年間は、御所の建設で四三億前後と頂点に立ち、とくに四十二年には成田空港にからんで千葉の御料牧場取得に別途二二億円の支出がみられる。

四四年には、施設一段落とともに、明治以後はじめて減少し、一七億六千万円、五十年には二二億四千五百万円となっている。（天皇家七人の生活費一億六千七百万、宮廷費一八億七千六百万、皇族費一億二百万円）

さらに忘れてはならない支出、宮内庁への四十億円がある。

国の一般会計予算、四十年三兆六千億、五十一年度の二四兆三千億、その中にある天皇関係への支出額が多いとみるか少ないとみるか、人さまざまなものがあると思われる。



天皇の記者会見に思う

天皇について語るときほど、時代の差が、立場の相違が、はっきりと表われることはない。二十世紀のタイムマシン、それが天皇である。

★まったく、たよりなかったですねえ。ともかく、天皇は一国の元首でしょう。

わたしらみたいな下士官でも、戦友は責任をとって、巢鴨へも行っているんです。

部下のやったことだって、二つや三つはしっていますよ。長と名がつけば、当然でしょう。それを、何ていうのか、まったくはぐらかされた感じですよね……馬鹿にされた、とても云うのか……。

ともかくわたしら、天皇陛下の命令だ、ってんで戦争したんだから。もう今度、戦争がおこったって、御免ですよ。一言ぐらい、気の毒だった、自分も責任を感じてる、ぐらい聞きたかったですよね。この頃、何だか気持がムシヤクシヤしちゃってかありませんよ。

★ああいうところへ引っぱりだすこと自身、間違ってる。戦争責任や、原爆問題

なんて、不意打ちの質問だったに違いない。実際失礼だよ。あなたは責任あると思いますか、なんて、答えのしようがないに決まってる。云えない立場にあるんだから。宮内庁は約束違反だとさぞかし怒っているだろう。なぜ記者会見なんかさせたのかねえ。

天皇の戦争責任は、ないとは云えない。しかし、終戦後、天皇が退位されたらどんな混乱がおこったか。それを考えたら責任追及なんかしてみても、何の意味があるのかねえ。

大体日本人から天皇制を除いたら何が残るか。国民的アイデンティティなんて他に何もありません。天皇制は日本文化

の象徴なんです。三島由起夫は正しかったと思うな。 大学教授 48才

★そうねえ、頭のいい方だな、と思ったわ。ずいぶんはっきりしたこと、云うじゃない。原爆のことなんか、ああいう返事をしたら、当然批判がおこるでしょう。そんなこと構わずに、はっきり云うんだから。 主婦 35才

★天皇の責任問題ってのは、組織の中の個人が、どこまで組織の名において行われた行為の責任をとるか、という一般的問題の一つだと思ふのね。ふつうだっただらとるべき責任を、終戦の時とらなかつた。だから天皇が退位しない限りこの問題はあくまでもつきまとう。それを忘

れたところに今度の問題の発端があるんだと思う。このところ、天皇をやたらに引っぱり出す動きが多いけど、どういうつもりなんでしょうね。今度のことのおこりは、フラフラとヨーロッパ旅行へ出かけたあたりに落んでいると思いますね。

仏語教師 45才

★責任と云うなら、ぼくら子どもだった人間を除いては、戦争前の大人はみんな責任あるんだと思うな。ジャーナリズムだって戦争気分をおおった張本人だったじゃないですか。その連中が天皇の責任追及なんて云っている。戦争した連中だって同じだ。命令される立場の一兵卒はどうかって？ それだって人間として兵役を拒否すべきだったんですよ。戦争しに行ったらやはり責任はあるんです。

天皇に責任がないとは思っていないけど、ま、責任のない大人は一人もいないということですよ。

商社マン 39才

★なんか初めから台本があったみたいね。宮内庁と記者とパッチリうちあわせがしてあって、天皇はそれを読んだだけで

感じ。質問も、あたりさわりのないのがほとんどだし、ただ戦争責任と原爆のことは、台本になかったのでしょ、ドギマギしちゃったもの。あっちにもこっちにも気をつかっちゃって……。外国記者の時の方が迫力があつたよね、まあ初めてだから仕方がないとして、これからどんどんやったらいいと思う。

私は、天皇には戦争責任はないと思うな。いくらあがめたてまつられていたといっても政治的な権限があつたわけではないし、今と同様まわりの人の力によって動かされていたんじゃないのかな、ただその力にあえてさからっても、という気が全然なかっただけで。本当に責任を感じていたら、占領軍が何と云おうとも何らかの形で責任はとれたわけでしょう。原爆の話にしたって、あれじゃみんな怒るよ、責任はなくとも数えきれない人達が「天皇のため」に死んで逝ったのだから涼しい顔で、どうしようもなかったのだとは云ってほしくない。

今のところ、天皇制はあってもかまわないと思うよ。エリザベス女王やフォード大統領が来られたとき、三木さんじゃ

サマにならない感じ。でも東京は過密なんだから皇居なんかずっと小さくしたい、部屋もあんな豪華でなくていいし、宮内庁も小さくしちゃって……。やっぱり税金だもん、もっと身近かな人であるべきでしょ。今は、宮内庁とマスコミとで遠く高い所へまつりあげられちゃって、訪米なんかも政治的に利用されているだけって感じだし、政治に関係しないってことのスジはきちんとしてほしいと思うね。

高校生 16才 女

★天皇陛下のテレビでの記者会見は、ちょっと見ただけで、感想といっても別にないですね。ぼくら戦争を知らないし、さりとて戦争に無関心というわけでもないが……仲間と話しあうことはあるんですから、例えばベトナムのこととかね。

テレビの記者会見が、どうしてそんなに問題視されるのか、よく分らない。戦争責任者だって聞かされたことはあるが、どのようにかわつたのかは、あまり知りません。他人の話を聞いては、ああそういうもんかなと思うけど、特別な関心はないです。

でもずいぶん年寄りですねえ。

男子学生 20才

★テレビを見るなんて、ゼロに近いし、

そんな暇もないのよ。どんな記者会見見たかは知らないわ。新聞ではちょっと見たけど、どうっていう感じは持たなかった。ああそうかと思っただけよ。そりゃね考えなくてはいけないんでしょうけれど。それより、生きるための働きの方が今の自分にはよっぽど大事だしね。

天皇陛下が今更どう云ってみたところで、戦争でなくなった人たちが生きかえるわけではなし、空しいことよね。もちろん戦争には反対よ。

自分で働いてお金を得ることがどんなことか理解できない育ち方をしているんだから、私たちと似たような考えなど、持てないでしよう。やいやい云うより自分たちが、しっかりした考えを持てばいいんじゃない？

働く母親 43才

★なんだか行事があると、いつもヒョコヒョコして感じがよくないけど、テレビでしゃべったときは、よかったみたい。

でもねえあの皇后陛下っていう人、しゃべることができるのね、びっくりした。

女子中学生 13才

★天皇が始めての記者会見をおやりになったのを拝聞して、まことに我々国民として色々の点で関心が深かった。しかし、もう少し質問の方法を宮内庁の皆さんと事前に考えた方がよかった。日本国の象徴として、あくまでも持続していただくことを原点に考えるなら、会見の方法をもう少し考慮し、もう少し大切な会見にせねばならなかった。会見そのものはまことに時宜を得たものであったと思う。いま世界に百四十一の国ができています。

大戦後新しくできた国は八十何ヶ国、昔は植民地であり、それぞれ酋長とか王様があった。それが新しい体制になった現在でも、その民族の象徴として存続している。この実績だけを見ても、皇室という象徴が各民族といかに密接に関係しているかがわかる。例えばマレーシアは一八四四年に英国のラフレスが占領して英国の植民地にした。その後独立国になり民主主義になって、国民が総理大臣をえ

らんでやっていると思っている人が多いが、実際は昔の王様を大統領にすえて民族の象徴としている。それだからこそ現在マレー半島が他のアジア諸国よりしっかりしている。また、シンガポールは今から十年前に独立し、国民の選挙で今のリーカンユーが総理大臣になった。それでは大統領は誰かと云えば、これも昔の王様である。象徴的な人があるというところが、その国の根源となって、理窟はともかく、その国の政治は安定し成功している。カンボジアにしても、共産党が入ってきて新しい国になっても、大統領には、王の子をもってきた。ラテンアメリカ、米国、カナダ等、歴史のない国は別

だが、長い歴史を持つ国、わけても二千年以上の脈々たる万世一系の皇室を持つ世界唯一の国日本は、又別格であり、天皇を象徴として行くことに対しては、深く考えて、あまり新しい革新的な国の真似だけはしたくないと思う。

大体戦争責任や、原爆の問題とかを、天皇に質問すること自体が、大変おかしいと僕は思う。仁徳天皇時代より、民の幸せを一筋に願っておられる天皇が、戦

争の責任者だと思ふ方がおかしい。第一、もったいないことだ。皇室と国民を、新

と考へた方がよかつた。

会社役員 87才

旅行服は何色だろう、という想像を、予想外のうす紫で、あつと云わせたエリザベス女王。正直、皇室外交の意義などとしやちこばるより、われわれ庶民は、女王のイヴニング姿や、大きな帽子を眺めて楽しんでむきが多い。

これが王様だったらどうだろう。シヨリの要素がもひとつ薄くなつて、華かさぐつと落ちるように思われる。往年の美青年フリップ殿下も、おぐし

が大分薄くなつたせい、殿下がいなくともエリザベス女王は特にイメージダウンしそうには思われないのに、美智子妃のつき従わない皇太子殿下のなぐめは、ぐつと退屈なものになるのではあるまいか。女王さま、万歳！

英国では、女王の妹マーガレット王女も、平民出の写真家と結婚されたのに、あいかわらず王女である。日本の皇室には、たとえ女子ばかりうまれても、明治以来女帝はご法度。上古はもちろん、江戸時代にも女帝は存在して

いたというのに。その上天皇家にうまれた女性で、マーガレット王女のように、長じて皇女として扱われているかたは現在一人もない。

建前だけにせよ、男女同権が法的に確立されている現代日本で、完全に不平等な扱いを受けているひと握りの女性、それが皇室の女性たちである。皇室典範は、女性に相続権をまったく認めていない。皇太子の次はその長男、

日本に女帝はなぜ出ない？

その弟、その次は皇太子の弟、と決まっている。女性には子どもの頃こそ内親王、プリンセスだけれど、結婚したとたんに、プリンセスではなくなってしまう。こんな片手落ちな皇室典範が、なぜいまでも残っているのか。おそらく敗戦国日本に、天下二民主的な憲法をつくろうとしたアメリカさんも、天皇制を温存する事に決めた以上、皇室典範だけ

はあまり弄らずに、明治以来の伝統を尊重した、というところだろう。旧民法では、女はひとたび結婚すれば、法的には無能力者同然、相続権も、嫡出の男子のつきには妾腹の男子が優先するありさまである。いまでも、嫁に行つた娘はもうよその人、実家の財産の相続などとはとんでもないという観念は、潜在意識のなかに根づよくはびこっている。皇室典範は、この伝統を忠実に受けつぎ、表現しているのだ。

もともと皇室の場合、子どもたちが相続権の平等を主張して、三種の神器をひとつずつ貰うことになつては、皇室の伝統は瓦解してしまふ。ご料地の場合もそうだろう。

せめて、皇女さまがた、持参金はたつぷりお持ち下さいませ……とは云つても、もしそれが、われわれの税金にひびくとなれば、急にケチ心がムラムラとおこるのも、庶民の偽らぬ心境である。

(K)

「わいふ」にのぞむこと

山本和子

私は、「わいふ」のあまり熱心な読者ではないので、毎号くまなく読んでいくわけではないのだが、内容に何となくもつたりなさを感じていた。それが、今回友人の熱心なすすめによって、つたない記事を寄せる破目になってしまった。さて、何を書いたものかとあれこれ考えながら「わいふ」の最新号（一三七号）に目を通していろいろに、これまでいっていた「わいふ」のものたりなさのゆえんが次第にはっきりしてきたような気がする。というのは、私自身いわゆる「わいふ」とは違った次元に居る人間だということに気がついたからである。

ここで、私の歩んできた道について少しばかりふれてみたいと思う。

私は、地方の高校を卒業して以来今まで二十年近くの間、自分で働くことによって生きてきた、いわゆる経済的に自立した女である。もちろん、精神的にも自立しているつもりである。幼い頃から父母の働く姿を見て成長したので、男女を問わず健康な人間は、一人前に成長したら自分で働いて生計をたてるのは当然のことだと信じて疑わなかった。

そのため、職業を選ぶにあたっては、

- ① 安定した収入を得られるもの。
 - ② 年令に制限なく、いつまでも働くことのできるもの。
 - ③ 自分の性格や能力に合ったもの。
- を条件に、何度か転職をした。又、仕事をしながら、独学をしたり、夜間大学で学んだりして、より適切な仕事につくために、いくつかの資格を身につけたりもした。

結婚については、専業主婦は望まないことにした。理由は単純そのもの。

- ① 見合結婚はいやだ。
- ② 恋愛結婚となると、相手に財ばつの子などありようはすがない。
- ③ 日本の平均的な労働者と結婚する以外に方法はない。

となると専業主婦におさまっているなどとても不可能だ。なぜなら、一般庶民は低賃金と高物価にあえいでいるご時世、健康で文化的な生活を維持しようと思えば、夫一人の収入に頼っていたのでは、どうしても老後の不安がつきまとうことになる。こうなると、何としても共働き賛成派の男性を選ばなくてはならない。どうもこの女性は、たいへん打算的な人間であるらしい。

現在、私は、私の希望をほぼ満たしてくれる男性にめぐりあって結婚している。もちろん共働きである。子どもは特はほしいと思わないので産んでいない。家事は夫と分担してうまくやっている。結婚したら、家事は妻がやるものというきまりはないのだから。

労力と時間を有効に使うことによって多忙な中にもゆとりを見出す努力をしているつもりである。そこで、何が生きがいかと問われたら、「特にない。だがしかし、生まれた以上、生きて行かねばならない」と答えることにしている。強いて云えと迫られたら「希望をもって生きること」「一日一日を大切に、悔いなく生きること」とでも答えられようか。

最後に一言、専業主婦としての座に不満をお持ちの「わいふ」の方々に申し上げたい。妻の自立、女性解放、男女平等、生きがい……その他諸々の願いを実現する道は唯一つ、叡知をもって決断し、積極的に困難にたち向かって、自分で行動をおこす以外にないのだということを。

商売繁盛

吉川道子

地下鉄人形町駅に降りて表へ出る。は

じめての街である。出掛けるとき、きいて来た風景とはまるっきり違う。しかしこんなことはよくあることだ。とにかく人の流れに従って歩き出す。

訪ねる問屋さんの方向に歩いていけばよいと思いが、辿りついたところが「水天宮」さまであった。やれやれである。

露店の甘酒屋に入って、甘酒をのみなが見るもの皆珍しい。

去年、主人が会社をやめて独立した。何よりも、採算のことが心配であったが、それよりも主人のその意気に感じて賛成したからには、自分も何かしなければならぬ衝動にかられて、呉服の仕立販売をする決心をしたことであった。

そして人形町の問屋にその日、仕入の相談に來たのであった。それが問屋さんならぬ水天宮さま詣である。

一体こんな調子ではこれからどうなるのだろう。商売始めのこの一年が、主人と私の運命にどう展けて行くのだろうか。神域に在るというわけではないが、たちまち神頼みの心境になれる素朴な私であった。

甘酒をのみ終って出てきた参道に「運勢」を売る店があり、ためらわず求めて

来た二冊の本を、主人と読み交しながら過したその夜のひとときを再び年の始めに語り合ったことは、お互に何かにすがりたい気持があったのだろうか。

今の世の中が私達の生活をおびやかす悪条件の揃った灰色の世の中であり、希望の持てない今年一年であらうとも、私は主人と私の商売が繁盛することを願うのみである。

商売一年生の、私達の商売繁盛する世の中が決して悪い世の中である筈がない。買いいもとめた「運勢」に過去が書かれていないのが嬉しい。

「晩年は物質的に恵まれず甚だ貧弱な境遇に呻吟して六十八・九才に生命を終る運勢」結構。今年の商売繁盛を祈るのみである。

年賀状は心で書くもの

三矢久子

毎年のことなれど年賀状ほど、その人柄のわかるものはない。忙しい職業の人、商売をしている人はなかなか一枚一枚心をこめて書くことはむずかしいかも知れない。

しかし家庭の主婦はなるべく知人、友人に心をこめて書いてほしいと思う。私の

ところにくる（私の名宛）年賀状の中には仕方なしに書いたと思える年賀ハガキもある。

その中に私と日本文通をしている奥様の中に御主人に書いてもらっている人がいる。その筆跡を見ると全然ちがう。その御主人は、又見事なる達筆でさすが書道に毎日時間をかけているのではないかと考える位である。

妻「あなた年末で忙しいから私の年賀状もついでに書いて下さいよ」

夫「そうか、よしよし。ついでだから書いてやろうか……」

との会話できくと自分のも書いてもらっているにちがいない。

お正月に受取った私にはいささか「味気ない年賀状」である。まごころのこもった賀状でないからである。どんなに忙しくても一筆でよろしい。「又本年もよろしくネ……」と下手な字でも良い。その奥様の自筆の年賀状がほしいと思う。手紙とか賀状は上手な字だから書くというのではない。心の問題である。

心で書いた年賀状をぜひ受取り度いものである。私は忙しい時でも暇を見つけて自筆で賀状を書いていきますことを付けくわえておきます。



おしゃべり

みなさんの声の広場で
す。感想、提言、どうぞ
何でも寄せて下さい。

高槻市

吉田 てる子

新しい「わいふ」の出版、お目出とう
ございます。

関西で発行された時点ではガリ印刷で
現在なつかしい思い出ですが、ちゃんと
本箱の中に静坐します。それからいろ
んな苦難をのりこえて……私の人生のよ
うなものです。

東京の皆さんが引きうけて頑張って下

さる由聞きまして大変うれしく思っ
ております。他人ごとのような言葉にな
りますがどうぞよろしくおねがい致し
ます。読み手ばかりで迷惑をかけた
と思っています。

頭を使って書くことが苦手で気が
るに書いてなんでも、思ったままを……台
所にいながら思いついたらメモに書
く、そのまま貴女がたの所へとい
った段階で、それを書けると思
います。気ままな私でお許し下
さい。

最近の吉田です、どうぞよろしく。

(写真を送って下さいました)

高槻市

城内 三千代

前略

先日、知人のところで「わいふ」を見
つけました。聞いてみますと一年ほど前

に入会されたそうで、とてもすばらしい
ものだ教わりました。

133号と136号を見送っていただきまし
たが、関西ではもう終りが近づいてい
る様子、せっかく入会したいと思っ
ておられます。……幸い東京の方
達が引継がれるように、もしよければ
私も「わいふ」の仲間に加えていた
だきたいのです。

始めは読手専門になると思いますが、
それだけでも価値あることと思
います。最近テレビの普及で活字など
忘れておりましたが、遅い目覚めと
して、続けていきたいと思
いますので入会の仕方、送金
の仕方等を教えて下さい。

十二年間続けられたそうですね。大
変だったと思います。本当にご苦
労様でした。

枚方市

藤 浦 だ い

前略、此の度はわいふを続けて下さることになり、こんな嬉しいことはありません。

今まで、読み手専門でしたので、今度は何とか書く事にも努力したいと思っています。どうぞ宜敷お願い致します。誌代は、郵送料一年分とりあえず千五百円同封しますので、ご査収下さいませ。

久留米市

瓜 生 恭 子

師走も半ばにさしかかり日に日に気忙しくなって参りました。

日頃皆様の御活躍におんぶしてばかりで相すまなく思っておりますが、毎月「わいふ」の届く日を楽しみに待っておりますので今後ともよろしく講読させていただきます。戴きたく誌代お送り致します。

今後のご活躍とご発展を祈りつつ少しずつでも参加出来るようにしたいと努めることに致します。

尚友人の門田見さんも引続きお願いしたいとのことで誌代は二人分同封致します。

すのでよろしく。

よいお年をお迎え下さいませ。

立川市

村 上 徹 子

前略ごめん下さいませ。

この度は「わいふ」編集発行をお引受け下さいましたそうで会員の一人としてうれしく存じます。

何かと大変なことで存じますがよろしくお願い致します。取りあえず半年分の誌代六百円と郵送料計七百円分切手を同封致します。郵送料がよく判りませんが不足でしたら後日お送り致します。

長崎県

上 野 久 美 子

新しい「わいふ」づくりに大変な毎日だと思えます。どうぞお体に気をつかれて、私たちのためによいものを作して下さいませ。お手数ですが十一、十二月号よりたのしみに待っております。来年こそ読み手ばかりでなく……とは、張り

きってみるのですが——。でもその分生活面で何らかの進歩を願ひ、そうできた

らいつかは——私にもできる！ たわごとばかりですみません。では「わいふ」づくりの皆様と、「わいふ」の皆様との健康と幸福を祈って！！

高槻市

辻 幸 子

新しい「わいふ」の誕生！ おめでとー！ 東京の編集委員の方々ご苦労が多かったことと存じます。ありがとうございました。

これからも引続き会員に加入させていただき度く存じます。（中略）

営利目的の誌発行ではないので〇月〇日発行と定めるのはむずかしい事と思いますが、隔月発行でもあり、心まちしている読者の為にも、発行日の大体の目やすがわかると有難いのですが……例えば偶数月か奇数月か、その上旬か中旬かといった具合にです。（中略）

素人の女性が書こうとする時、原稿用紙に何枚も書くという事はまことにおっくうなものです。皆さんの立派な文章をみていると、よけいに気おくれして書きづらいという事があるのです。

従来のわいふにも「お便り」という短

文の欄がありました。が、あくまで近況などが多かったように思います。これとは別に、お知らせにもあります——ハガキ一枚でよろしい——という欄、ハガキコーナーのような投書ページを設けて、そこにテーマをもちこみ、（出来るだけジャーナルな問題を扱うのを特色とする）一つの社会的な話題に対する——（例えば先のボク食べる人私つくる人にみられる論議について等……）出来るだけ多くの人たちの参加できる欄として、設けてはいかがでしょう。このコーナーにはハガキ一枚にまとめて投稿するきまり、といっ

「わいふ」再出発に あたって

照井陽子

昭和五十年十月をもって「わいふ」は関西編集スタッフから東京編集スタッフへと移行致しましたが、それは、「わいふ」を失うことは何としても惜しいということで、都内会員に話し合いをしましょうと呼びかけたのが始ま

た短文のコラム、ハガキコラムのようなものを設けては……と思っています。ハガキですとちょっと台所で走り書き、なんて出来るし、いざ筆を取らんと云った気重な事もなく気軽にペンをとれる一つの方法ではないかなどと考えています

が、いかがなものでしょうか。（中略）会員名簿もそのうち発表して下さる事を希望します。

ごちゃごちゃつまらぬ事を申しましたが、新しい「わいふ」のスタート心からうれしく期待している次第です。

「わいふ」は奇数月、二十五日に発行します。ハガキコーナー的なものとして「おしやべり」欄にどうぞ

りです。最終的に集まったのが、川村、亀山、和田、照井と、「あごろ」の斎藤さんがいらして下さいました。

これまで続けられたことへの反省と感謝の心で、再出発することになりましたが、それぞれ忙しい上、人数も足りないとなり、あれこれ考えあぐねた末、和田さんのお仲間、田中さんと林さん、荒木さんが参加して下さいました。これから慣れないこと故、ご迷惑をかけることもあるかと思いますが

滋賀県

三 矢 久 子

前略、早速お便りをいただきました。有難うございました。なんとかして「わいふ」を盛立てていき度いことです。及ばずながら陰の力になります。皆様「わいふ」を心から愛して下さることをのぞみます。私は「わいふ」の発行を今まで何よりの楽しみにしておりました。自分の生きがいです。大勢の会員の皆さんもふるって投稿していただきたいと思います。東京の方々も御苦勞様です。高木様に引きつぎ宜敷お願い申します。私もお友だちにハガキを出しています。では又。

皆さまのお力添えを心からお願ひ申し上げます。

主婦の周囲には、頭が痛くなるほど問題が山積しております。皆に問いかけて、お互い智恵を出し合いながら、少しでも支え合えたなら、出口を見つけるきっかけにならないでしょうか。

風邪が流行しています。何といっても健康第一です。

この一年、どうぞ良い年となりますよう祈ります。

編集後記

今月は、「わいふ」再発足にあたって、関西陣と交代した、東京スタッフの自画像を紹介します。どうぞよろしく。

●わいふの廃刊を惜しむ発言をしたばかりに、わいふ東京支部編集員の末席につらなる羽目になりました。自由気ままに書きたい時に書きちらすのが性にあっていますから、ちらりと後悔の念がうかばないといったら、うそになる。

大変な労力をつかって長いこと続けてこられた関西の方々の気持が生きるような雑誌がつくれるといいのですが。亀山●今まで書いたものからすると、ガッチリタイプと思われていたらしい。「関西わいふ」曰く、そんなんじゃないわねとか。一つの事を追求していくことが好きですが、無器用ですからどこまでやっていけるのか自信ありません。子供が楽しんでながら弾くピアノと同様、テントンシヤンとお琴を少しやります。子供等と語りながら考えたり、悩んだり、やっぱり私にとって宝としか云いようがない。生

活の中で教えられることがあまりにも多く、年令アップと共に自重しつつ、意欲だけは確かなようです。何の取得もございせんがよろしく。

照井

●「わいふ」の廃刊見るにしのびず、お手伝いすることになりました。ところが、イザ東京編集第一号を出すというときに、八王子という東京都下ではあるが、とてもなく遠いところへ引越し、照井さん田中さんもさぞ心中怒っていらっしやるでしょう。まあとにかく、できるだけのことをいたします。私の特徴？身長一四八、江戸っ子だから「きゃしゃで小作り」です。明治三十年代の女性の平均身長だそうで、見た目はまことに時代おくれ。

和田

●「生きる」とか「死」について考えてみたことがあるかと娘に聞いてみる。

「ああ、そんなのみなマンガがやってくれるの、悩んだり考えたり、結論もちゃんと出してくれるから私が考える必要はないの」とあっけらかんとした答えが返ってくる。マンガを読んで、自分も考えているつもりになっているのである。このつもり世代の娘に、親は一体何を教え

られるのだろうか。高二と中二の娘をもつ昭和ひと桁の母親です。

荒木

●「忙しく家事にはげみ、自分の犠牲を犠牲と感ぜず、夫や子の喜びを自分の喜びとすることが、なぜつまらないことなの？この頃の主婦の思考は結局女の不幸につながると思う」と、ある良識ある主婦はいう。「どうしてそんなに近視眼的打算的利己主義なの？」と問い返したい。与えられた固定化された既成の意識からの解放は、女も男も、ほのぼのと、和やかな人間に立ち帰らせてくれる。たとえ結果が世間的にみて不幸だったとて、私はどんなに幸せなことか。

林

●こんな雑誌を誰か作ってくれないかな……と想っていた私に、自分たちで作るほうが早そうだ、と気づかせてくれたのが「わいふ」です。投稿と企画の二本立てで、これまでになかった新しいタイプの雑誌を作りたい、とハッスルしています。

これまでの商売、フランス語。当分休業して「わいふ」に全力投球するつもりです。特徴、いつも人生を面白がっていること。欠点、朝寝坊。ではまた。田中

投稿は原則としてすべて掲載します。

投稿規定 200字—2000字程度、締切なし。

テーマ 原稿の他、日常生活の随想、疑問、

思い出、なんでもけっこうです。

わ い ふ

定価250円

隔月発行

一年予約1,200円 送料840円

編集発行人 田中喜美子

発行所「わいふ」編集部

東京都新宿区加賀町2-3 〒162

(03)260-5500 振替東京5-110430

印刷所・チトセ印刷 新宿区岩戸町10番地